バルティースキー・ポルトの囚人サラヴァト・ユラーエフとその周辺-帝政ロシアにおける地域史研究の試み-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 豊川, 浩一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8623

駿台史学　第132号　23-58頁，2007年12月
SUNDAI SHIGAKU (Sundai Historical Review)
No. 132, December 2007. pp. 23-58.

バルティースキー・ポルトの囚人 サラヴァト・ユラーエフとその周辺

── 帝政ロシアにおける地域史研究の試み ──

豊　川　浩　一

要旨　バシキール人はロシアの推し進めた植民政策に抵抗し，幾度も蜂起を繰り返してきた。なかでもプガチョーフ叛乱に積極的に参加し，現在のバシコルトスタンの英雄ともなっているサラヴァト・ユラーエフとその父ユライ・アズナリンの叛乱中の行動はそうしたバシキール人の歴史の特徴をよく反映していた。彼らはこの叛乱の終盤に拘束され，尋問を受け，無期懲役の判決を受けたのである。

1775年11月29日，二人は流刑囚としてバシコルトスタンのウファーから遥かバルト海に臨む港町バルティースキー・ポルト（ロゲルヴィク）へ着いた。到着してから彼らがどのような生活を送っていたのか不明な点が多い。知られているのは，サラヴァトが1800年9月26日に死去したということである。父ユライの死については，その時期がいつかわかっていない。ただ幾つかの史料からわかることは，彼が1797年7月から1800年5月22日の間に死去したらしいということだけである。また同地におけるプガチョーフ叛乱指導者最後の生き残りカンザファール・ウサーエフについては，1804年11月10日に死去している。彼らが流刑地に着いてからその死を迎えるまでどのような生活を送ったのだろうか。また彼らの周囲ではどのような問題や出来事が起こったのだろうか。以上の点を，最近のエストニア国立歴史古文書館における調査をもとに考えてみようとするのが本編の目的である。

キーワード：バルティースキー・ポルト，サラヴァト・ユラーエフ，プガチョーフ叛乱参加者，エストニア国立歴史古文書館

はじめに

1775年11月29日，プガチョーフ叛乱のバシキール人指導者サラヴァト・ユラーエフとその父ユライ・アズナリンはバルト海に望む港町バルティースキー・ポルト（Балтийский Полт，あるいはロゲルヴィク Рогервик，現エストニア共和国パルディスキ市 Paldiski）へ無期懲役囚として遥々ウファーから送られてきた。プガチョーフ叛乱で活躍した彼らについて，流刑地で

の様子に関しては不明な点が多い。そこで彼らはどのような生活を送り，いつどこで彼らはその生涯を終えたのだろうか。そもそもサラヴァトとユライ，および彼らをめぐる状況について史料はどのようなものが残っており，それらは何を語っているのだろうか。こうした疑問は両人を自民族の英雄とみなすバシキール人のみならず，われわれにとっても興味深い問題を含んでいる。なぜならそれらについて考えることは，単に叛乱に参加した一個人の人生の終わり方を検討するというだけにとどまらず，囚人をめぐる当局の監視・管理体制，監獄のある地方の特殊性，地方と中央との関係，そして何よりも地方社会の具体的な姿を問うものでもあるからである。つまるところ植民政策によって拡大したロシア帝国の支配のあり方を地域の視点で考えることと繋がるのである[1]。

従来の研究とその問題点

すでに1950年代には，概説書『エストニア共和国史』に6名のプガチョーフ叛乱の指導者たちがバルティースキー・ポルトへ流されたとの記述が現れた[2]。その後，サラヴァト・ユラーエフおよび同じく叛乱の指導者であったミシャーリ人カンザファール・ウサーエフの死に関する報告史料を最初に公にしたのはロセンコヴァ（Г. В. Лосенкова）の論文，およびロセンコヴァとサヴィナ（Савина）共同による紹介である[3]。続いて，スーロフ（Суров В. В.）とガーリン（Галин Г. М.）がサラヴァトの死を報じる史料を公にした[4]。プガチョーフ叛乱勃発200年を記念して旧ソ連で叛乱についての研究書や史料集の出版が盛んに行われるなか，バシコルトスタンでも上述の史料を含めた史料集が刊行された[5]。またウファー在住の郷土史家シードロフ（В. В. Сидров）はこのバシキール人英雄の足跡をたどる文章のなかでその史料を紹介した[6]。プガチョーフ叛乱の史料集や史料学についてモノグラフを幾冊も出している史料学者オフチーンニコフ（Р. В. Овчинников）も関連史料を多角的に調査している[7]。

しかしソ連邦崩壊を境に現在に至るまで史料調査を含めて研究には進展がみられないのも事実である。また上述の研究自体も史料の紹介が主眼であり，史料の分析を通して地域史研究の上で新たな地平を切り開くまでには至っていない。つまり先の諸研究はサラヴァトとその父ユライ両人のバシキール人を含めた叛乱参加者たちが当時のエストリャント県パルディースキー・ポルト（ロゲルヴィク）監獄にいたことを述べているに過ぎないのである。

利用史料と研究視角

とはいえ，上記の研究者たちの調査・研究により，エストニア共和国タルトゥ市エストニア国立歴史古文書館（Эстонский исторический архив）にサラヴァト・ユラーエフたちに関する史料の存在が明らかとなった。それらはフォンド「レーヴェリ県総督官房，1783～1796年，エストリャント県知事」（29番），フォンド「レーヴェリ総督事務所」（30番），およびフォン

ド「沿バルト総督」(291 番) に収められている[8]。それぞれ大部のフォンドではあるが，囚人に直接関係する記録ならびに彼らをめぐる高官たちの手紙のやり取りなど興味深い史料が含まれている。しかしながら，それのみで囚人の国制の中での位置付けや地方当局との関係などを解明することはできない。それゆえ囚人関連の史料に限ることなく，その周辺のいわば状況証拠を合わせて考えなければならないのである。

ここではエストニア国立歴史古文書館での史料調査とパルディスキ市（旧パルディースキー・ポルト）での現地調査に基づきながら，従来の研究では利用されなかった古文書史料をも積極的に利用し分析することにより ── 18 世紀エストリャンド県の状況に光を当てつつ ── 冒頭に掲げた問題を考えてみることが目的である。また本編はロシア帝国の植民政策に強く反対し，プガチョーフ叛乱参加にまで至ったサラヴァト・ユラーエフの経歴を辿った先の論文の続編という性格も合わせもっている[9]。

第 1 章　刑の執行と流刑地への道程

尋　問

サラヴァトとユライの尋問の様子について，すでに述べたことがあるのでここでは詳細を省くが[10]，審理それ自体は 7 か月以上の長きにわたって続いた。二人は手足に鉄の枷をはめられたまま，カザン，モスクワ，オレンブルクそしてウファーへと護送された。その間，尋問，拷問，対審が行われるという強行軍であった。取り調べにあたってサラヴァトはその当初からこの叛乱への参加は偶然であり，また強制されたものであると証言した。彼は父の叛乱参加について一言も触れず，仲間についても言及することはなかった。結局は当局の手に落ちることになる手紙をウファーの監獄の中から送ろうとさえした。それはシャイタン＝クデイスク郷にいる自分の親族に宛てて家族を守ってもらうように依頼した手紙である（1775 年 5 月 7 日頃に出したと思われる）[11]。しかし先の証言とは反対に，当局は彼の積極的な叛乱参加を示す多くの証拠をつかんでいた。

判決と刑の執行

1775 年 7 月 6 日，証言の抜粋とウファー地方官房（Уфимская провинциальная канцелярия）の命令がオレンブルクへ送られた。7 月 15 日，それらをもとにサラヴァトとユライについての件に関する裁定が下された。裁定を受けて，オレンブルク県知事レインズドルプ（И. А. Рейнсдорп）は「正確な執行のために（для точного исполнения）」それをウファーへ送った。7 月 22 日，ウファー地方官房は「サラヴァト・ユラーエフとユライ・アズナリンに対する体刑の執行について」命令を下した。すなわち「彼らユライとサラヴァトには，指令に添付するメモにある場所すべてにおいて，以下に記されている数だけ鞭打ち刑（наказание кнутом）に処

すべきこと。すなわち，ユライカ〔ユライの蔑称―筆者，以下の鍵括弧は筆者による補足である〕に対しては，シムスキー工場で45回，ウスチ＝カタフスキー〔工場〕で45回，カタフスキー〔工場〕で45回，オルロフカ村で45回である。サラヴァトカ〔サラヴァトの蔑称〕にはシムスキー工場で25回，ユラーエヴァ村で25回，ラク村で25回，クラスノウフィムスクで25回，クングールで25回，オサで25回，彼がエルジャカの手前でルイレーエフ中佐と戦闘を繰り広げたところで25回である。最後の場所，すなわちユライにとってはオルロフカ村で，サラヴァトカにとってはエルジャカ近郊で……鼻を裂かれた後，額と頬に定められた烙印〔鉄製の文字をかたどった釘が打ちこまれてある焼き印で3文字〈З, Б, И〉―― 悪人（злодей），叛徒（бунтовщик），反逆者（изменник）―― の烙印〕が押され，……この官房へ戻すこと」[12]。その後，彼らは無期懲役囚（вечная каторга）として「ロゲルヴィク」へ送られることになった。

囚人と同行することになる14等官にして通訳官トレチャコーフ（Ф. Третьяков）に対するウファー地方官房の指示は次のようである。「手足を鉄の枷で繋がれたシベリア道ウファー郡の長老ユライ・アズナリンとその息子サラヴァトを，確実な〔刑の〕遂行のために尉官殿〔トレチャコーフ〕の指揮のもと監視下において添付された目録にある場所に連れてくること。……それぞれの場所で目録に記された数だけ彼らを鞭打つこと。しかし最初にそれをしてはならず，まず初めに民衆の集まっている前で彼らの罪についてここに添付された決定を公に読み上げられるべきこと。……道中，記されている悪人たちを伴っている際，貴下自身は絶え間なく監視するとともに，貴下と派遣された部隊長とは一致して法的に厳格な措置を守るべきこと。それは，当の囚人たちが逃げ出し，あるいは何か特別な悪巧みによっても何もなすことができないようにするためである。道中，彼らを奪おうと企てられないように，そのような輩を撃退するためでもある」[13]。

サラヴァト親子は厳しい拷問を耐え抜いた。鞭打ちには長い生皮の鞭が使われた。「鞭刑」吏（мастер《кнутобойного дела》）は思い通りに自分の「生贄」を「脊柱まで」打ち割ることができたという。しかし，サラヴァもユライもそれぞれ175回と180回の鞭打ちに耐えた。その後，既決囚に同行していた「死刑執行人」（заплечный мастер）スースロフは二人の鼻を裂き，「烙印」を額と頬に押した。9月16日，トレチャコーフはウファー地方官房に刑の執行の様子について報告している。「〔前略〕犯罪人ユライ・アズナリンとその息子サラヴァトに対し，私への訓令に添付されていた目録の指定された場所において民衆の集まった前で，彼らの罪について訓令に付された裁定を公に読み上げた後，鞭刑と鼻裂き刑がなされ，烙印が死刑執行人スースロフによって押されたのであります」[14]。

しかしながら，故意かそうでないかは不明であるが，既決囚たちへの烙印が定められているより鮮明ではなかった。サラヴァトとユライに対する当局によるウファーでの検分の際，彼らの顔の烙印がはっきりしていなかったのである。そのため再びそれが押される旨の決定が下さ

れた。「彼らの鼻孔には今ではすでにびっしりとひげが生えている。ユライカの押された烙印もほとんど見えない。……両人の鼻孔はきれいにされていない。一人の烙印は新にされておらず，……このままでは彼らを流刑地に送ることは出来ない。……そのために，民衆を前にして公に彼らユライとサラヴァトにはその鼻孔をきれいにし〔すなわち再び鼻裂き刑に処し〕，ユライには烙印をより鮮明にするよう押すべきである」。「彼〔刑吏マルティン・スースロフ〕とやっとこ（щипцы）〔鼻裂き刑のための道具か？〕は刑の執行にあたりまったく〔それを〕正確に行わなかった。……この彼の厚かましさに対し体刑を科し，極めて厳格に鞭打ち刑を科すことによって身体に刻むべきである」[15]。トレチャコーフには「厳しい」譴責処分（крепкое внушение）」が下された。

流刑地への道

1775年10月2日，ウファーからカザンまでの徒刑の第1エタップ（護送区間）で，サラヴァトとユライを護送した隊長ブシュマン（И. Бушман）中尉はウファー地方官房から指令を受け取った。そこには次のように記されていた。「この指示，および手足に鉄の枷をはめられたシベリア道ウファー郡のバシキール人で前長老のユライ・アズナリンとその息子サラヴァトを受け取った後……彼らが貴下から逃げ出したり，自らに対し，また万が一にも貴下に対して何か悪巧みを行ったりすることがないように，彼らを絶え間なく監視し，カザン市へ彼らを連行すること。給付金のうちから80カペイカを1日あたり各人に2カペイカずつ使うこと。当の囚人用に街道に沿って橇賃として各馬あたり1ヴェルスタにつき1カペイカ支払いながら，通常の荷橇から2台ずつを徴集すること」[16]。

かくして流刑地への長い道行が始まったのである。ウファー，メンゼリンスク，カザン，ニージニ・ノヴゴロド，モスクワ，トヴェーリ，ノヴゴロド，プスコフ，デルプト（タルトゥ），レーヴェリ（タリン），そして1775年11月29日，2か月にも及ぶ苦しい旅の末，彼らは徒刑囚として目的地バルティースキー・ポルト（ロゲルヴィク，パルディスキ）へ到着した。

第2章　18世紀後半のエストリャント県とバルティースキー・ポルト

エストリャント県の状況

サラヴァトとユライはバルティースキー・ポルトに到着する前にレーヴェリにある通称「のっぽのヘルマン」といわれる要塞に一時収容されている。ここで当時のエストリャント県の行政制度について述べておくことは同県の特殊性を考える上で重要である。

1775年11月7日，エカチェリーナ二世は「全ロシア帝国県行政の基本法令」[17]を発布した。これにより全国は県ないしは総督管区に区分され，その長に県知事あるいは総督が置かれた。これは中央機構の極めて専門的な制度に合致させることを主眼に，能率的ではなかった地方行

政の改革遂行にあった。しかし何よりもプガチョーフ叛乱など民衆蜂起の再発防止が主たる目的であり，そのためにも地方行政改革はロシア帝国における貴族の強化を目指すものであった。政府は，地方貴族の抵抗にもかかわらず，沿バルト地方における1775年法令の普及を通して，この地域とロシアの他地方との行政上のより緊密な接近を図ったのである。

1775年の「全ロシア帝国県行政の基本法令」は，エストリャント県においては1783年7月3日付けおよび12月3日付けの布告によって実際に施行された。まず1783年7月3日，レーヴェリ県の制度に関する布告が発せられた[18]。続いて12月3日付け布告により，レーヴェリ総督府が置かれ，翌84年1月5日付けの元老院令によって総督制が宣言された[19]。広範囲にわたる権限が付与されている県知事の下，皇帝が直接任命する総督が行政を遂行することとなった。エストリャントとリフリャントが一人の総督の権力下に入ったのである。

県知事は地方の全機構の活動に対して責任を負うことになった。総督行政と検事の職を除いて，地方の官僚の任命，彼らに対する報償は県知事の意思に基づくものであった。また知事には，民衆が不満をもって立ち上がった場合，鎮圧のための軍事力行使が委ねられていた。地方の軍隊と警察は総督の直接的な管理のもとに置かれたのである。

しかし新しい官僚は行政制度や訴訟手続き，その他の行政分野における従来の秩序回復を目指す旧来の地方貴族や都市の上層の要求を満足させることはできなかった。彼らはこれらを1796年のパーヴェル一世の即位のときに再び得ることになる[20]。1796年11月28日付けの布告は，リフリャントとエストリャントにおける以前の官庁の復活について述べている[21]。レーヴェリ総督府は撤廃され，国家の諸機関も削減された[22]。総督制時代の諸機構のうち県行政のみが残された。すなわち県の主要な行政制度と県財務庁（казенная палата с казначейством），そして地方行政のトップとしての県知事の職務である。この時期から知事はエストリャント県文官知事（Эстляндский гражданский губернатор）と呼ばれることになった[23]。

1802年まで，県知事は元老院の管轄下にあった。1802年の省の創設以降，知事は内務省の管轄に入った。諸省，またその管轄下の諸機関のために，県知事は1802年に設立された官房（канцелярия）の援助の下にその職務を遂行していくことになる[24]。

バルティースキー・ポルトの状況

サラヴァトたちが流されたバルティースキー・ポルトに目を向けよう[25]。もともと同地はスウェーデン語でロゲルヴィク（Rågervik）と呼ばれた地で，北方戦争の最中にロシア領となった。18世紀前半においては，レーヴェリがロシア海軍の主要な軍港であった。しかし海軍にとってロゲルヴィク入江も新たな軍港として魅力的であった。1718年以降，海軍基地と要塞を作るピョートル一世の計画に従って港の建設が進められ，それは中断される1767年まで続いた。1774年，徒刑囚を利用した建設再開が試みられるも成功しなかった。またここは

流刑地としても機能していた。1767年，ロシア人はこの地を「バルト海の港」を意味するバルティースキー・ポルトと名付けたが，ロゲルヴィクという名称も史料の中で使われている。エストニア語ではパルディスキと発音され，1933年にそれが現在に至るまで公式の名称となった。

湾の近郊に発生したこの町の成長は緩慢であった[26]。レーヴェリのギルド商人たちが地方都市の商業発展に制限を加え，商業活動を完全に掌握していたのである[27]。しかし，エカチェリーナ二世の諸改革にともない，第5番目の郡の創設とともに，バルティースキー・ポルトがその中心となった[28]。18世紀後半から19世紀60年代までエストリャント県の都市人口の動態を示すと表1のようになる。それによると，1782～1825年に，県の都市人口は2万3,000人から3万5,400人へと飛躍的に増加し，その伸び率は54%であった。しかし，原因については不明であるが，例外的にバルティースキー・ポルトは1819～25年の間に人口が減少している。1782年の都市人口2万3,000人はロシア諸都市の全住民数の約5%を占めているに過ぎず，いまだ都市化は低い段階に留まっていた。続く80年間で都市化のペースは8.7%にまで上昇した[29]。

なお，現在に至るまでバルティースキー・ポルトに関する文献はほとんどない。ただ管見の限りでは，1970年にラビ（B. Labi）が都市の大きさ，国家と民間の建物，人口，都市構造，

表1　エストリャント県内の諸都市の人口動態

都市/調査年	1782年	1819～1825年	1862～1863年
レーヴェリ（タリン）	10,653人	12,872人	20,680人
デルプト（タルトゥ）	3,421	8,499	13,826
ナルヴァ	3,000[1]	3,500[1]	8,144[2]
パルヌ	1,954	4,087	6,690
クレッサーレ	1,379	1,945	3,378
ヴィリヤンティ	603	951	2,406
パイデ	440	857	1,169
ハープサル	594	647	1,570
ラクヴェレ	375	574	1,564
ヴァルカ	402	451	2,617
バルティースキー・ポルト	211	184	400
ヴォル（1784年創設）	—	797	1,587
総　　計（約）	23,000	35,400	64,000
	1796年	1815年	1863年
ロシア諸都市の全住民数（百万人）	1.3	1.7	6.1

出典：История Эстонской ССР. Таллин, 1961. Т. 1. С. 806.
注：1）資料の数字は概数である
　　2）1861年の数字である

総督制時代の市会の構成などを調べた研究があるだけである[30]。以下では，それに基づいて都市の様子について述べてみることにする。

1783年，沿バルト地域における総督制度の設置に際し，バルティースキー郡創設とともにこの町は都市の権利を得た。街路は直交するように計画された。通りと通りで区切られた市街区域は25箇所から成り，そこに家屋が建設された。1784年の都市平面図によると，街路を除いた都市の広さは3万5,910平方サージェン（1サージェン＝2.134メートル）である。市庁舎，小さな店，市場に割り当てられる広さは1,523平方サージェン，利用されていない土地1万836平方サージェン，国有地7,755平方サージェンであった。住民は70区画，1万5,794平方サージェンを利用していた。地図には区画の所有者，彼らの職業や地位，そして土地の広さが記入されている表が掲載されている。

当時の市警備隊司令官（городской комендант）デ・ロベルチの報告から，より詳しい情報と民間人の家の様子がわかる。すなわち，建材，建物の階数，部屋数，窓や暖炉の数，建築された日，家屋の所有者についてである。1785年における国有の建物は33棟，1788年における民間の建物は65棟であった。

住民数，性別，社会階層は1795年の納税人口調査から判明する。その年の調査簿には1782年の人口調査についての記載もある。1782年，町には209人の人口があり（上の表1と若干齟齬がある），そのうち男性は96人であった。1795年，人口は520人となり，そのうち男性は326人であった。人口の上ではこの間2.5倍に増加している。基本的にはポサート地区のロシア人，官僚，農奴，その他からなっている。また同じ時期に市内の農奴の数は2倍となったが，これは主にエストニア人と例外的にロシア人であった。

市の主要な機関は市会（городской магистрат）である。これは1783年12月28日に選ばれた2人の市長（бургомистр）と4人の市会参事（ратман）で構成されていた。市会はエストリャント県参事会（Эстляндский губернский магистрат）の管轄下に入る。県参事会は選挙の結果を承認し，選挙と選挙の間に以前の市会参事の地位に新しい参事を任命した。1785年5月2日にエカチェリーナ二世が都市への恵与状を発するまで，市会がバルティースキー・ポルト唯一の権力機関であった。恵与状発布以後，新しい諸機関が創られた。市筆頭者（городская голова），共同市ドゥーマ（общая городская дума）および6名の構成員からなる市ドゥーマ（городская дума）である。すべての市会の職務は選挙で選ばれた人によって遂行されることになったが，市長の権利は財産資格によって条件付けられていた。

市会と6名からなる市ドゥーマの構成員については，エストリャント県参事会の議事録やレーヴェリにある総督事務所へ送った報告書から判断することができる。都市行政の主要な地位に就いたのは主にバルト・ドイツ人であった。

すでに述べたように，1796年11月28日付けのパーヴェル一世の布告によって沿バルト地

域の総督制度は廃止され，またバルティースキー郡も廃止された。この市はいわゆる「定員外」の都市となった。共同市ドゥーマ，6人市ドゥーマおよび市会は1797年前半でその存在を止めた。市の上級機関は再びかつての権力機関である代官裁判所（фогтейский суд）に移ったのである。

第3章　バルティースキー・ポルトをめぐる諸問題

18世紀末から19世紀初頭のエストリャント県に関する現存する史料は当然ながら多種多様である。バルティースキー・ポルト市に関わるものも行政，財政，福祉，入国管理問題，その他と多岐にわたっている。以下では，エストニア国立歴史古文書館にある史料のうちからその幾つかを示すことによってこの市の状況や特殊性を探ることにする。

国有家屋の売却

バルティースキー・ポルトにおける老朽化した国有家屋の修理に関する文書（1787年8月1日～1804年）[31]や国有家屋について（1797～1819年）という史料がある[32]。たとえば，後者の史料には次のような文面が見える。

「〔前略〕去る1799年10月17日付け第14995号の元老院令と閣下〔エストリャント県知事ランゲリ〕のご報告によって，国有の木造家屋のより役立つ利用のために，バルティースキー・ポルトにある老朽化したそれらを誰か他の人に早急に売却するように求められた。それというのも，このような家屋が時間の経過とともに老朽化して国庫の損失となることがないようにするためである」（トマス・ブルンからランゲリ宛て，1800年3月27日）[33]。これは中央および地方の当局がその国家財産としての家屋の処理について注意を払っていることを示す文書である。同様の史料は多い。

入国管理問題 ── 不審者の入国阻止

また当局の緊急の課題として地方の治安維持や国境問題における任務の遂行があった。特に，当局は国境を越えて人々が移動することに目を光らせていた。

「ロシア帝国の境界内へさまざまな官位を有する人を入れず，また彼らの到来について注意を払うことについての一件」（1797年5月27日～1800年1月19日）という史料のなかに次のような文書がある。「リフリャント県，エストリャント県およびリトヴァ県を統括する元帥（генерал-фельдмаршал）であるレープニン公」から県知事ランゲリに宛てた依頼文である。「アレクサンドル・アレクセエヴィチ・ベズボロトコ公〔当時の宰相〕の私宛て報告書のコピーに添えて，閣下の管轄下にある県内すべての地方の長たち（земские начальники）に，国外へ追放されたロンベ伯爵と名乗る外国人がロシア国境内に入ることがないようにという指令を発

することを命じています。同様に，貴下所管の国境税関長に対しても上記のことをお知らせ願います」（レープニン公署名，1797年9月5日）[34]。

H. B. レープニン公のA. A. ランゲリ宛て1798年1月28日付け書簡は，「前述のベリヴォリフ少佐を決してロシア国境内に入れないように」と指示する[35]。そのためにランゲリ宛て1798年3月10日付け書簡では，バルティースキー・ポルトでも監視せよと伝えている[36]。県知事宛ての別の書簡は次のように言う。「閣下の本3月23日付け書簡（第205号）は，自らをベルジャフと名乗るロシア臣民という者が，当地〔レーヴェリ？〕，あるいはガプサリやバルティースキー・ポルトへ船で到着した場合，彼を監禁し，即刻閣下のもとへ護送すべく私が所管する諸港に私が命じるべきだとしています」[37]。

またランゲリ宛て1798年4月11日付けの書簡は次のように述べている。「閣下の本4月10日付け極秘書簡（第253号）は，どこの港でも偽名をヘルツェルと名乗るヴィンという不審なフランス人がリューベックから船でロシアにやって来た場合，彼を即刻しかるべき監視部隊をつけて閣下のもとへ連行するように，私の所管するすべての港の税関に私が命令を発すべきだとしています」[38]。レープニンからランゲリへ，国境線を厳しく取り締るようにというやり取りは史料の中ではこの後も続くのである[39]。

とはいえ，なぜ彼らが入国を拒否されるのかは上の文書だけでは不明である。ただ考えられるのは密入国者や不審者の取締りであり，1797年に沿バルト地域で発生していた農民蜂起との関連である。後者に関して言うと，それはパーヴェル一世の即位とともに始まった蜂起で，農民たちは「自由」獲得の期待を抱いていたという。96年12月，エストリャントに接するプスコフ県の農民の間にはツァーリに嘆願すれば自由を得ることができるという噂が広まった。翌97年，ヨーロッパ・ロシアの4分の3の県が農民運動に巻き込まれた。同年にはエストリャントにも広がった。その主な目的はバールシチナ義務の軽減である[40]。当局はこうした動きの拡大とそれについての情報が諸外国へ漏れるのを恐れたのかもしれない。

犯罪と刑罰

上記の史料以外に，犯罪とその処罰に関するものもある。たとえば，「自由人（вольный человек）Г. ゲンリクソン（Г. Генрихсон）を窃盗の理由で，エストリャント刑事裁判所（Эстляндская уголовная палата）の判決に従い，鞭刑に処した上で終身刑として送ることについての一件」である。1797年の報告は次のように述べている。「第662号，リフリャント県事務所宛て，1797年5月15日。エストリャント県事務所（Эстл. Губ. правление）は，以前提出した自由人の窃盗事件に対するエストリャント刑事裁判所における裁判に関して，自由人ギンリヒ・ギンリクソン（Гинрих Гинрихсон）に対する刑事裁判所で40打の鞭刑という判決が下されたという本年1月31日付け前レーヴェリ下級警察署（нижний земский суд）第182号報

告を聞き，その裁判所の判決に従って無期懲役刑の労働に使役するために〔彼を〕送らなければなりません。当の自由人ギンリヒ・ギンリグソンは窃盗に対するエストリャント刑事裁判所の判決により，監視のもとリフリャント県事務所へ終身要塞労働の使役のために送るべく彼に対する判決である体刑を延期しなければなりません」[41]。

これは僅かな事例ではあるが，当時の犯罪に対する刑罰の重さを考える材料を与えてくれると同時に，後に本編で問題とする囚人たちの要塞労働での使役が実際に行われていたことを示している。

第4章　囚人たちをめぐる諸問題

囚われのプガチョーフ叛乱参加者たち

この町はロシア帝国全土からの流刑囚が刑期を果たすべく送られてくる場所でもあった。バシキール人に限っても，1755～56年のいわゆるバトゥィルシャ蜂起の参加者がここに送られた。そしてプガチョーフ叛乱を指導した人々も流されたのである。ロシア国立古法文書館（РГАДА）とエストニア国立歴史古文書館（ЭИА）には，バルティースキー・ポルトへ送られたプガチョーフ叛乱参加者たちについての史料がある。以下では，P. B. オフチーンニコフの史料研究を基に論を進める[42]。

1777年8月9日，時の県知事И. シーヴェルスは元老院へ宛てた報告書で，1775年1月31日にバルティースキー・ポルトに送られてきたプガチョーフ叛乱参加者のうち生存者は5名であると伝えた[43]。死去した者の名前は不明であるが，М. Д. ゴルシコフ，И. И. ウリヤーノフあるいはД. К. カラヴァーエフのうちの誰かであることは確かである。

1775年，有名なプガチョーフ叛乱指導者が送られてきた。И. С. アーリストフである。彼はトムスク歩兵連隊の「逃亡伍長」で，プガチョーフによってアタマンに任じられた人物である。彼はしばらくレーヴェリ市に留め置かれ，「他の囚人とともに市の労働に」使役された[44]。同年7月2日，新たに4名の囚人が送り込まれてきた。エメリヤーン・イヴァーノヴィチ・チュレーネフ（退役兵士），チモフェーイ・ブールツェフ（幇堂者），セミョーン・アンドレエーヴィチ・ノヴゴロードフ（農民）そしてヤーコブ・オシチェープコフ（農民）である。この4人はシーヴェルスの1777年8月9日付け報告によると，まだバルティースキー・ポルトにはいなかった。知事は元老院にバルティースキー・ポルトからレーヴェリへ7名の囚人たちの移送を願い出ており，レーヴェリに留められていたのである。バルティースキー・ポルトでは「何も仕事をせず」に陽気に暮らしているとして，彼はレーヴェリ湾内の島にある石造りの砲兵保塁修理のため労働に利用すべきであると述べた[45]。

結局，1778年1月18日付けの命令によって元老院は次のような指示を下した。「バルティースキー・ポルトにいる囚人たちが」，「ある者は陛下の命令によって，またある者は元老院の命

令によって」そこに送られてきたという状況に鑑み，「バルティースキー・ポルトから当該の囚人たちを〔レーヴェリ〕市の労働に使役するために送り出すべきではなく，彼らがそこにいるように定められた場所で，しかるべき牢獄に彼らを入れておく」[46] という。この元老院令に従い，レーヴェリからバルティースキー・ポルトにチュレーネフ，ノヴゴロードフ，ブールツェフ，オシチェープコフが戻された（アーリストフがもし生きていれば戻されたであろう）。

1778年9月にはエカチェリーナ二世の戴冠20周年を祝うことになっていた。これに関連して，8月7日，マニフェストが発せられ，恩赦が出されると全国各地に伝えられた。11月1日，県副知事グローテンゴリム中将は元老院に，囚人チュレーネフ，ノヴゴロードフ，ブールツェフおよびオシチェープコフに対し恩赦があるかどうか尋ねた。しかし，なぜポチターリン，ドルゴポーロフ，カンザファール・ウサーエフ，サラヴァト・ユラーエフ，ユライ・アズナリンの名前がなかったのかは不明である。この照会に対して，元老院は1778年1月18日の元老院令を考慮して，先の人々には恩赦は当てはまらないと通達してきた。副知事の書簡は1782年12月5日の元老院における会議で検討されている。そこで元老院たちは次のような決定を下した。チュレーネフ，ノヴゴロードフ，ブールツェフおよびオシチェープコフは「極めて重要な事件に関して」審理され，「無期懲役」となってバルティースキー・ポルトに送られることが決まったのであるから，「彼らはそこに死ぬまで留まっていなければならないのである」，と。1782年12月23日，以上の内容の元老院令が副知事のもとに届けられた[47]。

バルティースキー・ポルトに囚われているプガチョーフ叛乱参加者たちについて直接言及しているアルヒーフ史料はない。これを補うためにも他の種類の史料の利用が不可欠である。ペテルブルク中央国立歴史古文書館（ЦГИАП）にあるペテルブルク神学主教区監督局（духовная консистория）のフォンドにはバルティースキー・ポルトにあるゲオルギエフスカヤ教会（図2を参照）の18世紀第4四半期の信徒登録簿（книги учета прихожан）がある。この時期，バルティースキー・ポルトの住民の大部分はロシア人守備隊の将校，兵士，水兵，港湾勤務者，手工業者，商人などであった。すべて彼らはゲオルギエフスカヤ教会の正教信徒であり，毎年自分の子供たちや家僕を連れて「聖四旬節」の日に告悔を受けたり聖体を拝領するためにやって来るのである。司祭によって告悔簿にそのことが書き込まれていた。この告悔簿はバルティースキー・ポルトの正教住民の名簿でもあり，毎年の全体的な統計資料となっていた[48]。年によって信徒の数にはばらつきがある。男性は1778年の300人から1791年の745人まで，女性は1793年の29人から1778年の461人まで幅があった[49]。この数字は表1で挙げた数字と大きな開きがあり，それをどのように考えるべきか不明である。住民以外の信者の出入りもあったとみるべきかもしれないし，守備隊の移動があったためかもしれない。

しかし，どのような理由からか，告悔簿には囚人であるプガチョーフ叛乱参加者たちについての記録がない。サラヴァト・ユラーエフ，ユライ・アズナリン，カンザファール・ウサーエ

フはイスラム教徒であったが，他の人々は正教徒であるにもかかわらず告悔簿に載っていないのである。宗務院の決定によると，たとえ囚人であっても彼らは教会による破門を解かれ，教会に戻り，他の正教徒たちと同様に権利を同じくするとされていた[50]。

ゲオルギエフスカヤ教会の戸籍簿（метрические книги）[51] を見ると，叛乱参加者に関する一つの書き込みがある。そこにはA. T. ドルゴポーロフについて極めて興味深い内容が書かれていた。1783年11月19日，バルティースキー・ポルトで最近死んだ兵士ヤコヴ・シャルディーモフの寡婦マトリョーナに娘エカチェリーナが生まれた。11月20日に行われた彼女の洗礼式の名付け親が「囚人エフスタフェイ・ドルゴポーロフ」と「ミハーイロフの娘アンナ」だった[52]。これが奇妙なのは，ドルゴポーロフが正真正銘の分離派教徒であったことである。分離派教徒は公式には決して正教教会内での洗礼式で名付け親としてその役割を果たすことはできないのである。名付け親として出席すれば，それは公式の教会規則に違反したことになる。加えて，1775年1月9日に出された裁判所の判決は，ドルゴポーロフを常に「枷をはめた状態にしておくこと」と定めていたのである[53]。バルティースキー・ポルト当局はこの決定に従っていた。1797年5月19日付けの「バルティースキー・ポルトの流刑囚に関する記録文書」（表2）のなかのドルゴポーロフは「特に枷をはめられた手足を十字に組まれて」いた。ゲオルギエフスカヤ教会の司祭はどのように分離派教徒のドルゴポーロフを洗礼式に名付け親として出席させたのであろうか。司祭は囚人がこのときだけ枷をはずすことに目をつぶっていたのだろうか[54]。そもそも彼を名付け親に指名した理由は何か。寡婦の娘だからなのか。不明である。

1788年夏，ロシア＝スウェーデン戦争が始まった。1790年3月6日，2隻のスウェーデン艦がバルティースキー・ポルトの投錨地へ接近して部隊を上陸させた。デ・ロベルチ指揮下のロシア側守備隊は40門の大砲で迎え撃ったが，スウェーデン軍の敵ではなく，瞬く間に制圧されてしまった。スウェーデン軍は占領し奪い取った大砲を叩き潰し，軍需品の倉庫と若干の商船を燃やし，市内から住民を連れ去り，軍税として4,000ルーブリ受け取りの約束を取り付けてこの町を離れた。この事件はプガチョーフ叛乱参加者やそのほかの囚人とは直接関係のない出来事であったが，スウェーデン軍の来襲時に彼らは牢獄のなかで鍵をかけられ，厳重な監視下にあったであろうことは想像に難くないのである[55]。

囚人記録文書の作成

1797年，バルティースキー・ポルトの囚人たちに関する書簡のやり取りが始まった。元老院検事総長クラーキン（А. Б. Куракин）[56] から県知事への問い合わせが発端である。1797年4月28日付けの手紙で，彼はエストリャント県知事ランゲリ（А. А. Лангель）に対し，「貴下管轄下の囚人たち（ссылочные преступленики）」について情報を知らせるように要求した。ちな

みにこの書簡をランゲリは5月12日に受け取っている[57]。

クラーキンに答えて，ランゲリは5月16日付け報告の中で，エストリャント県にいるすべての「囚人たち」は「バルティースキー・ポルト」一か所に集められていると述べている。そこには27名の囚人たちがおり，1772年には8名，「1775年に送られてきたプガチョーフの悪党ども（пугачевская сволочь）は6名」，1784年には13名が送られてきた。ランゲリは同地の警備司令官エクバウム（Герман Экбаум）大佐（後に少将に昇進）にこれら囚人の情報を記した流刑囚関連記録文書（именный список）の提出を求めたとしている[58]。

確かに，1797年5月16日付けの県知事ランゲリからバルティースキー・ポルト警備司令官エクバウムに宛てた書簡（第130号）では，司令官に対し，「そこにいる囚人すべての年齢，また，いつどこから送られてきたか，さらにどのような罪によってそこにいるのかを記録した上で，同地の囚人たちについての流刑囚関連記録名簿」の提出を求め，同文書をペテルブルクの検事総長クラーキンへ届けなければならないと付け加えたのである[59]。同月19日付けエクバウムからランゲリ宛ての書簡は先の指令を確かに受け取ったことを伝えている[60]。

同年5月19日，警備司令官エクバウムは早速文書の作成に取り掛かり，これを完成した。それはエクバウムの官房で作成された「バルティースキー・ポルトにいる高齢の懲役囚全員に対して，年齢，いつどこから送られ，いかなる罪を犯し，どのような刑罰を受け，どこの生まれであるか，彼らの証言によって記した流刑囚に関する記録文書（Статейной список）」と題されるものである（表2と図1を参照）[61]。これによると，27名の囚人がバルティースキー・ポルトの監獄に収監されており，そのうち6名がかつてプガチョーフ叛乱に参加した人たちであった。まず3名が1775年1月31日に同地へ送られてきた。彼らについて次のように記されている。「カンザファール・ウサーエフ。62歳。ノガイ道オレンブルク県ウファー郡ザヴィヤザ村[62]の勤務人。ミシャーリ人の百人長。病気なし」。「オスタフェイ・ドルゴポーロフ。71歳。ルジェフ＝ヴォロジメーロフ市の商人」。「イヴァン・ポチターリン。47歳。オレンブルク県ヤイーク市のカザーク。病気なし」。3人全員について彼らは「鞭刑，鼻裂き，烙印がなされた」と記されている。この記述以外に，ドルゴポーロフについては，「特に枷をはめられた手足は十字に組まれている」という[63]。

バルティースキー・ポルトにいる4人目の「プガチョーフ一味（пугачевцы）」は，1775年7月2日から同地にいるエメリヤーン・チュレーネフ65歳であった。彼は「トボリスク県ヤルトロフスキー地区クングール大村の兵士の子。老衰していてほとんど目が見えない」状態であった。5番目と6番目に名前が挙がっているのがバシキール人ユライ・アズナリンとその息子のサラヴァト・ユラーエフである。彼らはバルティースキー・ポルトに1775年11月29日に送られてきた。両人は「オレンブルク県ウファー郡テコエヴァ村」出身であり，「鞭刑，鼻裂き，烙印がなされ」た。ユライについては，彼は75歳で，「老衰し，足には慢性化した壊血病によ

る傷がある」。サラヴァトについては，45歳で「健康である」と記されている[64]。

ゲルマン・エクバウム大佐の署名があるこの文書は確かにランゲリのもとに届けられ清書された。県知事によって署名された1797年7月（日付けなし）作成の文書（Список）がエストリャント県事務所のアルヒーフに保管されている[65]。

その後，同様の流刑囚関連記録文書が何度か作成され，国立歴史古文書館には少なくとも次の6点が残っている。1800年5月22日付けの記録文書（Статейной список. ディトマールの署名あり。囚人13名，うちプガチョーフ叛乱関係者はカンザファール・ウサーエフとサラヴァト・ユラーエフの2名が生存）[66]，同年6月7日付けの一覧表（Ведомость. ディトマール少佐からの資料を基に作成とある。署名なし。囚人13名）[67]，同年（日付けなし）の一覧表（Ведмость. ディトマール少佐からの資料を基に作成とある。署名なし。囚人13名）[68]，1801年10月29日の一覧表（Ведмость. ディトマール少佐からの一覧表を基に作成とある。署名なし。囚人11名，うちプガチョーフ叛乱関係者はカンザファール・ウサーエフのみ生存）[69]，同年10月（日付なし）の記録文書（Статейной список. ディトマール少佐の署名あり。囚人11名）[70]，1802年12月16日の名簿（Именной список. 署名なし。囚人11名）である[71]。署名があれば，それから判断して，どれがバルティースキー・ポルトから出され，どれが県庁で保管され，あるいは元老院へ提出されたかがわかる。もちろん両者の間に書き間違いや修正などにより記載内容に異同も見られる[72]。

囚人労働力利用の問題 ── 検事総長クラーキンと県知事ランゲリの往復書簡から

レーヴェリにいるランゲリがペテルブルクのクラーキン公から受け取った1797年7月4日付け書簡（極秘，第144号）では，元老院の最高権力者として検事総長の地位にあった公がエストリャント県内の囚人たちについて情報を提供するように知事に求めている。「機密局[73]における元老院の至高なる命令に従い，さまざまな官位を有し，また男性女性にかかわらず罪を犯した者は，その罪の度合いに応じて兵役や労働へ，また官位や称号の剥奪あるいは剥奪されることなく，いずこかへの転居，ないしは移住を命じられて送られたのであります。しかし彼らの行動や彼らが生きているかどうか，機密局は情報を持ちません。さまざまな状況に応じて，当の機密局は彼らが生きているかどうかを知るだけではなく，彼らがどのような行動をとっているかを知らなければなりません。閣下，何卒，県内の諸都市に検事総長の手を通して送られた閣下の管轄下にある囚人たちについて，姓名，官位があるかないか，いつ，どこに，誰がいるのかをお知らせください。今後，そうした情報は私に毎月送付してください。彼らが死んだ場合，それについて，いつ死去したかお知らせください」[74]。

これは単なる囚人に関する情報提供を地方当局に求めただけのものではなかった。中央政府は囚人たちの労働力に期待をかけていたのである。9月18日，クラーキンはランゲリへの手

紙で，懲役囚たちをネルチンスクでの徒刑，兵站部主計課の管理下にあるイルクーツクの国営ラシャ工場（суконная казенная фабрика под управлением кргс-цалмейстера）での労働，あるいは主にタガンロークにおける要塞建設などの労働（крепостные работы），以上の3箇所にその労働力を提供するよう命令している[75]。実際，皇帝の命令に従って，ニジェゴロド県の既決囚がどこへ何名送られたのか示す史料がある。それによると，1797年9月の段階で，かつて2等少佐，家内奴僕，輔祭であった3名が上記労働につかされていた[76]。このことから，先の知事への情報提供を求める書簡は中央政府からロシア全土の知事に発送されたこと，および囚人労働の使役が全国レヴェルのものであったことを窺わせるのである。

囚人の一覧表を添えてランゲリからクラーキンへ宛てた同年9月30日付け書簡（第336号）は，ランゲリがクラーキンの新たな提案に答えたものとして重要である。「閣下の9月18日付け手紙（第10041号）のなかで述べられている既決囚をさまざまな処罰〔すなわち労働〕に赴かせるべしという至高なる皇帝陛下ご記名の命令に従い，従来から当地にいる囚人たちを他のさまざまな場所へ送るべく選別するにあたり，1770年に老衰と盲目という理由のために残っていた人々のうち，実際にバルティースキー・ポルトにいる囚人たちについて，閣下に対し謹んで名簿を添付する栄誉に浴します」。囚人たちのために衣食住を支給することは国庫にとって負担になるとした上で次のように述べている。「〔病気がないのは―この語句が消されている〕カンザファール・ウサーエフ，イヴァン・ポチターリンおよびサラヴァト・ユラーエフは病気がありません。他の人はすべて老衰し，さまざまな病気に罹っています。閣下に対し，彼らの罪状のどのような種類の者がどこへ送られるべきかどうか，謹んでご命令をお与え下さるようお願い申しあげます」[77]。史料はランゲリが照会という形で答えたものであった。この段階ではランゲリは健康な囚人の移送を考えているようである。書簡でのやり取りはその後も二人の間で続けられた。

同じ9月30日付けのクラーキンからランゲリへ宛てた手紙（第10864号，ランゲリは10月6日にこれを受け取っている）はいま少し明確に問題の所在を示している。「公にして侍従武官長殿〔ランゲリ〕のお手紙を頂戴しました。北部諸県からナルヴァやレーヴェリへ要塞労働に罪人たちを送るため，私の義務に従ってお知らせいたします。私によって伝えられた今月18日付けの至高なる専制君主たる皇帝陛下のご命令に基づき行わなければならない選別によって，貴下管轄下の県内で当地にいる罪人たちのうちどれだけの人を要塞労働へ振り向けるのか，すなわちレーヴェリでの要塞労働使役のために〔どれだけの人を〕残しておくべきかをお命じ下さい。また貴下に送付しました様式に則り，私にその一覧表をお送りください」[78]。クラーキン公へ宛てたランゲリの10月9日付け手紙（第366号）はそれに対する答えである。「エストリャント県にいる罪人を要塞労働での使役のためレーヴェリに残すことに関する去る9月30日付けの閣下のお手紙（第10864号）を拝受する栄誉に浴しました。ノヴゴロド県事務所から

要塞労働へと罪人のうち4名がすでにここに送られ，〔彼らを〕当地の要塞少佐（плац майор）の管轄下へ私から渡しましたこと，および本県にいる罪人をネルチンスクでの労働，イルクーツクでのラシャ工場〔での労働〕そして要塞労働への使役のための送付から，去る9月30日付けの手紙（第336号）に添付されている名簿に載せた多くの者を除外することについて閣下にご報告いたします」[79]。

クラーキンのランゲリ宛て10月14日付けの書簡（第11901号）では，上記ランゲリの照会に対する不満が述べられている。「至高なる君主である皇帝のご命令を閣下に伝える去る9月18日付けの私の文書 —— そのなかでは，貴下管轄下の県からほかならぬ罪人を次の3箇所，すなわちネルチンスク，イルクーツクのラシャ工場，および要塞労働へ送るべきであることがはっきりと述べられていました —— に対して，私に寛容なる主人である貴下から9月30日付けで，1775年からではなく1753年以降から始まってバルティースキー・ポルトに到着し，現在そこにいる囚人たちについての名簿が届けられてきました。しかしそれは上で述べました至高なる〔皇帝の〕ご命令に，また私から貴下に対して送付した様式に対してさえまったくそぐわないものであります。なぜならば，そのなかで示されている囚人たちは決められた場所に送るには少しもふさわしくないからであります。そのうえ閣下は彼ら健康な者から3名について，さらに第4の隔離政治囚〔エウドキム・クラクコーフを指すが，この人物については不詳〕についても私の許可を求めています。そのことすべてに対し，私は貴下に上述の皇帝陛下のご命令の本質について説明する必要があります。すなわちご命令は貴下管轄下の県内の罪人に対して向けられたものであります。彼らはエストリャント県の裁判所の決定により，労働に服し移住することを宣告された者です。貴下は彼らのうち誰が上記の3箇所に送るのにふさわしいかを選別しなければなりません。それゆえ〔労働へ〕送るために彼らを選り分け，貴下に送付しました様式に従い，私に一覧表をお送りくださいますように」[80]。

10月24日付けランゲリのクラーキン宛て書簡（第400号）はそれに対する答えである。しかしそれは，「閣下の書簡で述べられている罪人のうちからどのような人をどこに送るのかという9月18日付け皇帝陛下の命令」をクラーキンが自分に示してくれたことに謝辞を述べているに過ぎない[81]。これに対し，11月22日付けクラーキンからランゲリ宛て書簡（第13786号）は単なる命令内容の確認であり[82]，12月21日付けランゲリの手紙はその返信である（第497号）[83]。それらの書簡からでは囚人送付問題に関して進展が見られたかどうか不明である。しかしこの囚人送付の問題は単にクラーキンとランゲリ二人だけの問題ではなかった。

イルクーツク国営ラシャ工場を管轄する兵站司令官（кригс коммисар）ノヴィツキーからエストリャント県事務所に宛てて1798年4月19日付けの書簡が送られてきた。「イルクーツク県知事にして帯勲者チモフェイヴィチ・フォン・ナゲリ少佐は，去る〔1〕797年11月16日付けの自らの通知により私に以下のことを知らせてきました。1等文官にして検事総長……アレ

クセイ・ボリソヴィチ・クラーキン公閣下は，同年9月18日付け書簡で，移住することに決まった罪人たちを私の管理下にある国営工場に送るように，と皇帝陛下がご命令を下したことを伝えてくださいました。この結果に従い，裁判所の判決によって罪人たちをイルクーツクで拡大している種々の国営ラシャ工場へ送るにあたり，エストリャント県事務所がその送付のたびに私にお知らせくださいますようお願い申し上げます」[84]。

つまり囚人の労働力利用の問題は現実にロシア帝国全体の問題として浮上していたのであり，それに関する指令や伝達はすでに当該の地域へ伝えられていた。受け入れる側でもその準備をしていたことになる。とはいえ，上の諸史料から判断すると，ランゲリはこの問題にあまり深入りせず，むしろそれから逃れようとしていたとの印象を受けるのである。またイルクーツク国営ラシャ工場へバルティースキー・ポルトの囚人たちが送られたという史料も残っていない。

囚人への物資の支給

しかし何よりもわれわれが目を向けるべきは囚人たちの生活状況についてである。つまり彼らが何を食べ，何を着て，どのような生活をしていたのかということである。これについて現存している史料は何を語っているのであろうか。

管見の限り，その生活状況を知る手がかりとなる史料が最初に現れるのは1797年10月3日の文書である[85]。それは，「一覧表（Ведомость）。来る1798年に向けて，懲役囚の衣食住のため決められた2年および1年の支度（аммуници）にどれだけのものが必要となるのか，それを以下に示す。1797年10月3日」と表題がつけられている（エクバウム少将の署名あり）。それによると，「〔囚人〕26名に対して〔上の同年5月19日の「記録文書」では囚人が27名いた〕，〔1〕797年〔の状況〕から〔1〕798年1月1日までに必要となるであろう食料」として次のような食料とその価格が記されている。穀粉（муки），1チェートヴェルチ（1チェートヴェルチ＝約210リットル）あたり5ルーブリ50カペイカの価格で77チェートヴェルチ2チェトヴェリーク（1チェートヴェルチの8分の1，1チェトヴェリーク＝約26.24リットル）（合計424ルーブリ87カペイカと2分の1）。ひき割り穀物（курупе），1チェートヴェルチあたり9ルーブリの価格で3チェートヴェルチ4チェトヴェリーク5ガルネツ（1チェトヴェリークの8分の1，約3.28リットル）（合計32ルーブリ20カペイカ）。塩，1プード（1プード＝約16.38キログラム）あたり60カペイカの価格で15プード18フント（1プードの40分の1，約358.3グラム）（合計9ルーブリ27カペイカ）。以上の食料を与えることになった。

また上記以外に，囚人たちには衣類などの支給もある。「囚人に対し1年の支度として」，ルバーシカ用に麻布を1アルシン（1アルシン＝71.12センチメートル）あたり10カペイカの価格で各人12アルシンずつ312アルシン，港で使用するために麻布を1アルシンあたり8カペイカの価格で各人8アルシンずつ208アルシンなど。「2年間にわたり18人〔この18人とは

誰なのか不明である〕に対して」は，カフタン用に8ヴェルショーク（1アルシンの16分の1，約4.45センチメートル）幅の粗く染めていない自家製ラシャが与えられる。26名に対しては，食料用給付金として1798年1月1日から1799年1月1日まで365日各人1カペイカずつ与える。

これらの他に，獄舎の暖房，パン焼き，そして食事の支度のために1年分の薪として，1サージェン（1アルシンの3倍，約2.134メートル）あたり3ルーブリ50カペイカの価格で薪45サージェンを支給する。獄舎での夜間の明かりなどのために購入する油と灯心1フントあたり12カペイカのものを120フント与える（合計14ルーブリ40カペイカ）。総額861ルーブリ82カペイカ2分の1であった。

上記のものがすべて支給されていたかは不明であるが，1人1日あたりの穀物支給は約1.7リットルの計算となる。また囚人に対してはさまざまな食料・衣料・暖房用資材などが与えられていた。しかもその価格にいたるまで詳細にわたって明記されている点が特徴的である。

1797年の史料以外に，同様の史料は国立歴史文書館には2つ存在する。一つは1798年11月19日付け「エクバウム少将」の署名があるものであり（総額582ルーブリ22カペイカ）[86]，いま一つは1799年11月（日付けなし）の「テンゼン大佐」の署名が付されているものである（総額569ルーブリ20カペイカ4分の3）[87]。それらも上の史料の内容と同様に，囚人に支給する物品とその金額が詳しく記載されている。

上記一覧表の総計がこの市の財政のどれだけを占めるのだろうか。幾つか参考になる史料がある。1800年7月8日付け「エストリャント県各都市の収入についてのメモ」である。それによると，その年のバルティースキー・ポルトの収入は963ルーブリ62カペイカであった。ちなみにレーヴェリは2万3,849ルーブリ73カペイカである[88]。同年の囚人扶養のための一覧表がないので比較は難しいが，時期的に一番近い上記1799年のそれと比べると，市の全収入の約60%が囚人扶養の総額に相当する。もしこの支出すべてを市が賄うのであれば，市当局にとって大きな財政的負担であることは間違いないが，実際はどうなのか不明である。

囚人に対する生活用物資の支給は中央からの指示でもあった。そのことを窺わせる史料がある。軍事参議会からエストリャント県事務所に宛てた1798年12月14日付けの指令書は，「必要から要塞労働に使役された囚人たちの生活用に食料，衣類，食費として給付される金銭およびそのほかの不可欠なものを支給することについて」述べている。「働く期間に応じて与えられる物品とそのおよその金額を示して，男性流刑囚1人と女性囚人1人に対する衣類，靴，食料および食費として給付される金銭の規定。1798年11月18日」として具体的に一覧表にして印刷され配布された。印刷された指令書が同地方にまで送付されていることから，指令はエストリャント県だけに対してというよりは全国に向けて出されたと考えられる。指令書によると，男性が3年間働くために，高くて9ルーブリ（1年間あたり3ルーブリ）から安くて6ルー

ブリ（1年間あたり2ルーブリ）分の羊の毛皮外套（шуба）1着，高くて90カペイカ（1年間あたり30カペイカ）から安くて85カペイカ（1年間あたり28カペイカ3分の1）分の羊の毛皮が裏打ちされたラシャ製の帽子（шапка）1つが与えられる。また1年間に支給される食料品として，各種6ルーブリ相当の穀粉3チェートヴェルチ，1チェートヴェルチあたり8ルーブリ80カペイカのひき割り穀物12ガルネッツ，1プードあたり45カペイカの塩24フントなどがあげられている[89]。これは国家が定めた規定である。先のエクバウム少将の署名のある「一覧表」などもこうした政府からの指示を具体化したものであろう。

しかし，上記の生活用物資の支給がなされたとしても，それがいつからなされたのか，また本当にそれが実行されたのかという問題もある。そのことを考慮に入れず史料の文面のみを鵜呑みにすることはできないのだが，現在のところそれに関する史料はない。

獄舎での生活

監獄は太い丸太で作られた大きな壁で囲まれていた。獄舎には2層からなる板寝床と天井に吊り下げられた柳でできたハンモックが据えられていた。1760年代に港の建設と修理は中断されたが，商業用港の修理と2つの埠頭の建設に囚人たちが使役されていたのである[90]。

獄舎での生活そして実際の労働の様子はどうであったのか。これに関する直接的な史料はない。しかし，すでに指摘した史料「流刑囚に関する記録文書」（表2）に記載されている囚人たちの健康状態からある程度想像することは難しいことではない。囚人の健康状態についての記述からすぐ気づくのは，彼らのほとんどが何らかの障害や病気を持っていることである。尋問中の拷問や同地での労働によると思われる骨折や脱臼を除いても，長年の獄舎生活で生じたであろう壊血病，胃腸の病気，肺病，中風，視力の減退など重度の障害や病気を患っている者が極めて多い。ランゲリが指摘しているように，1797年5月段階で健康な者はわずかに3名であった。生活用物資の支給がなされたとしても（またそれが本当になされていたかという疑問もあるが），それだけで健康を維持するには十分とは言えないであろう。また彼らは徒刑囚として港湾建設に借り出され，毎日，岸壁を掘っていた。現在も，海岸に沿って彼らが石を削ったとされる場所が残っている。そうした労働も彼らの体力を著しく消耗させたであろうことは想像に難くない。まさに囚人をめぐる状況は厳しいものであった。

そうしたなか，囚人労働力の利用問題が浮上してきた。地方当局者は，史料にあるように，囚人の扶養が財政上負担であると感じていた。それゆえ当初は4名の囚人の移送を考えていた。しかし結局は囚人を他地域へ送らなかった。「流刑囚に関する記録文書」から考えても，僻遠の地での労働に耐えられるような体力を囚人たちが保持していたとはいえないのは確かであった。それゆえ県知事は囚人を他地域への労働に積極的に送り出そうとはしなかったかもしれない。これ以外に囚人の移送をしなかった理由はなかったであろうか。たとえば物資の支給との

関係である。さまざまな物資を購入する金銭の出所については何も史料が残っていないが，もし囚人の数に見合った金額を国庫が負担するのであれば，地方当局はその金額を削減されることを望まなかったであろう。そのため市以外へ囚人労働力の提供を積極的に行わなかったと考えることもできよう。

第5章　サラヴァトの最後

日々の報告とサラヴァトの死

その後のサラヴァトたちバルティースキー・ポルトの囚人たちについて，アルヒーフ史料は何を語っているのであろうか。

1800年5月8日，県知事ランゲリはレーヴェリの警備司令官カストロ・デ・ラツェローダ（Я. Ф. Кастро де Лацерода）伯にメモを送っている。ランゲリがバルティースキー・ポルトの警備司令官テンゼン（И. П. Тензен）大佐に対し，彼の監視下にある囚人たちを廃兵隊（инвалидная команда）司令官ディトマール（К. И. Дитмар）少佐の管轄下に移すように命じる内容である（その経緯については，次節の11月19日付け軍事参議会の通達書を参照）[91]。これを受けて，同年5月15日，ディトマールはエストリャント県事務所に，彼がバルティースキー・ポルトの「囚人たち（каторжные невольники）」を自分の管轄下に置いたこと，また囚人2名が死去したことを報告している[92]。ちなみに，同年5月22日の「記録文書」（ディトマール署名）では囚人は13名であった。

同年7月13日の報告で，ディトマールは「私の管轄下にある囚人は13名であり，彼らは無事であります。ここにそのことについて県事務所にご報告いたします」，と伝えている[93]。その後も同年7月15日[94]，8月3日[95]，9月4日[96]の報告が残っているが，内容的にも形式的にも同様である。

同年9月28日，ディトマールはエストリャント県事務所にサラヴァト・ユラーエフの死について報告している。「今月26日，囚人サラヴァト・ユラーエフは死去しました。ここにそのことについてご報告いたします」[97]。さらに4日後の10月2日，この司令官は再び同じ内容の報告書を提出することになる。「私の管轄下にあった囚人たちは，以前のリストにありましたサラヴァト・ユラーエフが9月26日に死去したことを除けば12名であります。ここにそのことについてご報告いたします」[98]。同様の内容のものが11月2日にも提出されている[99]。かくしてロシアの植民政策に対し激しく抵抗し，プガチョーフ叛乱に積極的に参加した指導者サラヴァト・ユラーエフが死んだ。48歳であった。波乱に富んだ人生であったが，バシキール人にとっても一つの時代が終わったといえる。なお父ユライの死に関する報告はないが，すでに挙げた諸史料から推測して，1797年7月から1800年5月22日の間に死去したであろう。

叛乱最後の生き残りカンザファール・ウサーエフの死

その年の11月19日，ペテルブルクの軍事参議会はエストリャント県事務所に囚人の管轄権に関して次のような通達を発した。「軍事参議会は前レーヴェリ軍務知事（военный губернатор）である陸軍少将ゴルチャコーフ公から参議会の命令に対して2つの報告を受け取った。第一に，バルティースキー・ポルトにいる囚人13名を，警備隊の廃止にともない廃兵を所管するディトマール少佐の管轄下におき，毎月，彼が囚人たちについて同事務所に報告するというものである。第二に，1名の死去のために囚人は12名となったということの他に，〔囚人は〕どこから，どのような罪で，送られてきたかという証拠を付した一覧表，および彼ら全員の年齢と老衰のために労働に適さないということを付け加えていた。そこから次のことが判断される。これら二つの報告からでは以下の点が不明である。すなわち，上記囚人たちはバルティースキー・ポルトの労働に恒常的に使役することが定められているのか。あるいは労働時のみ送られてくるのか。加えて，〔そうしたことは〕ディトマール少佐所管のいかなる命令によるものなのか。彼らは現在どの官庁が管轄するのか。すなわち民事当局なのか，あるいは軍事当局が当たるのか。参議会が囚人たちに関して調査すべく情報を得ることができるよう，そしてそのことについて知らせるようエストリャント県事務所に通達する」[100]。これは現存する史料のなかで唯一囚人の管轄権に触れたものである。いずれにせよ，当局が囚人管理問題を強く認識するようになったことを示している。

ディトマールの報告はこの後も続き，1800年12月4日[101]，11日[102]，25日[103]，そして1801年1月1日[104]となされている。しかしそれは定例の報告であり，囚人たちに変化がないことを伝えているに過ぎない。

内容に変化が見られるのはその年の暮れである。1801年12月7日，囚人ミハーイラ・ルィーブニコフの死が伝えられた[105]。翌1802年，ディトマールはバルティースキー・ポルトでの職を辞し，新しい司令官にはペゲロフ大尉がついた。12月16日の報告では，11名の囚人がリストに上げられ，カンザファール・ウサーエフは8番目と呼ばれていた。彼以外のプガチョーフ叛乱の指導者はすでに皆死去している。残っているのは，パーヴェル・ロバセンコ，イヴァーン・ロゴーシキン，ガヴリール・ローギノフ，ヴァシーレイ・フローモフ，ミハーイラ・シャリーモフ，エヴスチェグネイ・スィソエフ，パーヴェル・ミハーイロフ，カンザファール・ウサーエフ，ヤコヴ・イヴァーノフ，アンドレイ・クリーモフ，エゴール・ヴャジーロフ，以上11名であった[106]。

1804年3月22日の報告は同月19日にヴァシーレイ・フローモフが死去したこと[107]，10月18日の報告は同月15日にヤコヴ・イヴァーノフが死んだことを伝えている[108]。そして，同年11月12日のペゲロフ大尉のエストリャント県事務所宛て報告は次のようにいう。「囚人は8名であります。ただ一つカンザファール・ウサーエフが神の思し召しにより老衰のため今月

10日に死去したことを除いて平穏であります（благополучно）。このことについてエストリャント県事務所にご報告いたします」[109]。彼は1775年にここに送られてきた13名のプガチョーフ叛乱指導者の一人であった。30年を監獄で過ごした最後の生き残りが生涯を終えたのである。69歳であった。翌年2月7日，ペゲロフはエストリャント県事務所に，囚人が7名になったことを伝えている[110]。

おわりに

以上，プガチョーフ叛乱終結後，拘束され尋問された後のサラヴァトとその父ユライが無期懲役囚として送られたバルティースキー・ポルトの様子を中心に，彼らと彼らを取り巻く状況を検討した。その基礎となるのがエストニア共和国タルトゥ市国立歴史古文書館所蔵のアルヒーフ史料である。史料はすべてを網羅しているわけではないが，同地方のさまざまな側面や囚人たちを取り巻く興味深い状況について教えてくれる。

サラヴァトとユライはバシキーリアから遥々エストリャント県西北の港町にまで流された。囚人たちの調査が始まった1797年5月には，彼らと同じプガチョーフ叛乱参加者たち6名を含め27名が収監されていた。1800年9月26日，サラヴァトが死去し，1804年11月10日には当地における最後のプガチョーフ叛乱指導者カンザファール・ウサーエフも死んだ。その間，多くの囚人が亡くなった。彼ら囚人たちを取り巻く状況にどのような変化があったのか推し量ることは容易ではない。

政府が特に注目していたのは囚人労働力の利用についてであった。元老院検事総長と県知事の往復書簡がそれを示している。バルティースキー・ポルトではそれは実現しなかったが，実際に他の地方では行われていたのである。また史料から彼らの生活について当局も注意を払い，食料や衣類などさまざまな物資を支給していた（かのように見える）。監獄内での生活や労働そのものについては不明な点が多いが，囚人たちの健康状態から察して劣悪であったであろう。それは上で示した当局の配慮と矛盾しているようにみえるものの，現実はそうであった。

しかし問題はサラヴァトたち懲役囚の周囲で何が起こっていたかである。彼らを取り巻くさまざまな状況はわれわれに当時のエストリャント県やロシア帝国が抱える問題をよく示している。入国管理問題，犯罪に対する処理，囚人労働力の利用問題など，従来あまり研究の対象とされることのなかった問題の解決こそが実は当時の国家にとって具体性を帯びた緊急の課題であった。地方社会はその解決を迫られていたのである。

（本稿を書くにあたり，エストニア史の専門家小森宏美（京都大学）氏ならびにタチアーナ・ソル女史を始めとするエストニア国立歴史古文書館の方々にお世話になった。記して感謝の意を表したい。）

表2　バルティースキー・ポルトの流刑囚に関する記録文書（1797年5月19日）

バルティースキー・ポルトにいる高齢の懲役囚全員に対して，年齢，いつどこから送られ，いかなる罪を犯し，どのような刑罰を受け，どこの生まれであるかを，彼らの証言によって記した流刑囚に関する記録文書。それについて以下に示す。

1797年5月19日

名　前	年齢	どれほど前から流刑地にいるのか		どのような犯罪を犯し，またどのような刑罰を受けたか	どこの出身か，またその領主は誰で，居住地はどこか	司令部将校立ち会いのもと医務官による〔身体が〕動くか動かないについて〔の検査〕
		〔やってきた〕年月日	どこから送られてきたか			
ヴァシーレイ・ポチェリャーヒン	79歳	〔1〕753年9月22日	クロンシュタットから	殺人に対して，鞭刑と烙印がなされた	アルハンゲリゴロド県リセストロフ郷ヴェルフネラギン共同体の皇室領農民	左足と右手に骨折あり，松葉杖をついて歩く
パーヴェル・ロバセンコ	72歳	759年10月21日	レーヴェリの牢獄から	一度の強盗と6度の盗みに対して，鞭刑，鼻裂き，および烙印がなされた	ホトミンスキー郡コロチロフカ大村の皇室領民〔農民とは記載されていない〕	老衰，両足に傷，不治の病あり
イヴァーン・ポドゥブノイ	69歳	760年7月16日	キーエフ県官房から	強盗と殺人に対して，鞭刑がなされた	ミログラード市，カザーク出身（カザーク騎兵中尉）	両足に壊血病あり，そのため松葉杖をついて歩く
イヴァーン・コロリョーフ	72歳	764年5月13日	スモレスク県官房から	殺人に対して，鞭刑，鼻裂き，および烙印がなされた	スモレンスク県ロサ市ペロフ村の領主プズィレフスのスコフ〔農民〕	まったくの盲目
ピョートル・フョードロフ	60歳	765年11月2日	プスコフ郡官房から	教会からのイコンと教会用品の盗みに対して，鞭刑，鼻裂き，および烙印がなされた	プスコフ市の司祭の息子	両手は拷問室でねじ上げられたために折られ，右足が不自由，松葉杖をついて歩く
ニキーフォル・シュリャーフチン	61歳	766年1月19日	サンクト・ペテルブルク県官房から	窃盗に対して，鞭刑，鼻裂き，および烙印	カルーガ郡セルペイスク市の農民出身	視力が弱い
セミョーン・トゥルーソフ	60歳	766年10月21日	サンクト・ペテルブルク県官房から	強盗に対し，鞭刑と鼻裂きがなされた	モスクワ市，領主アレクセイ・シェンシンの家内奴僕	ほとんど目が見えない
イヴァーン・ロゴーシキン	64歳	767年7月10日	サンクト・ペテルブルク捜査局から	強盗と窃盗に対し，鞭刑，鼻裂きがなされた	タンボフ市マルシャ大村の司祭の息子	両足に慢性化した壊血病による傷あり

名　前	年齢	どれほど前から流刑地にいるのか		どのような犯罪を犯し，またどのような刑罰を受けたか	どこの出身か，またその領主は誰で，居住地はどこか	司令部将校立ち会いのもと医務官による〔身体が〕動くか動かないについて〔の検査〕
		〔やってきた〕年月日	どこから送られてきたか			
ガヴリール・ローギノフ	67歳	768年4月16日	サンクト・ペテルブルク県官房から	偽造のインペリアル(10ルーブリ金貨）および半インペリアルの製造に対し，体刑を科し，顔には刻印が押されるも，控えめな人生にふさわしく，それを目立たなく押された	オロネツ市ユクシエリツァ村下流の住民，国有地農民	胃腸を病み，その上，左足を脱臼している
ゲラーシム・シチプコフ	79歳	773年11月20日		殺人に対し，鞭刑，鼻裂き，および烙印がなされた	経済参議会管轄コゼリスク郡グリン村の農民	老衰，身体全体が衰弱している
ヴァシーレイ・フローモフ	68歳	774年7月16日	ノヴゴロド県から	ヴォロヂーメル街道で元老院参事にして帯勲者の故フセーヴォロド・アレクセーヴィチ・フセーヴォロドスキー氏に対する傷害を負わせた者たちを蔵匿したことに対し，鞭刑と鼻裂きがなされた	モスクワ郡グヴズジンスカヤ皇室領郷ドゥヴォルニコヴァ村の農民	左足膝近辺の骨折，左手人差し指と小指の2本が曲がらない
ミハーイラ・ルィープニコフ	60歳		モスクワ捜査局から	仲間ともにモスクワでの強盗に対し，鞭刑と鼻裂きがなされた	モスクワ第3ギルドの商人	衰弱，胸から（膿のある）痰，肺病
ミハーイラ・シャリーモフ	68歳			地方の強盗たちおよびその他の者とともにペテルブルク街道をうろつき，成功しなかったが，彼らの悪巧みに対し，鞭刑と鼻裂きがなされた	オムシェンスク市クルィツィク小村，領主ミハイール・ステパノヴィチ・メンシンの農民	慢性病および腹部の病気

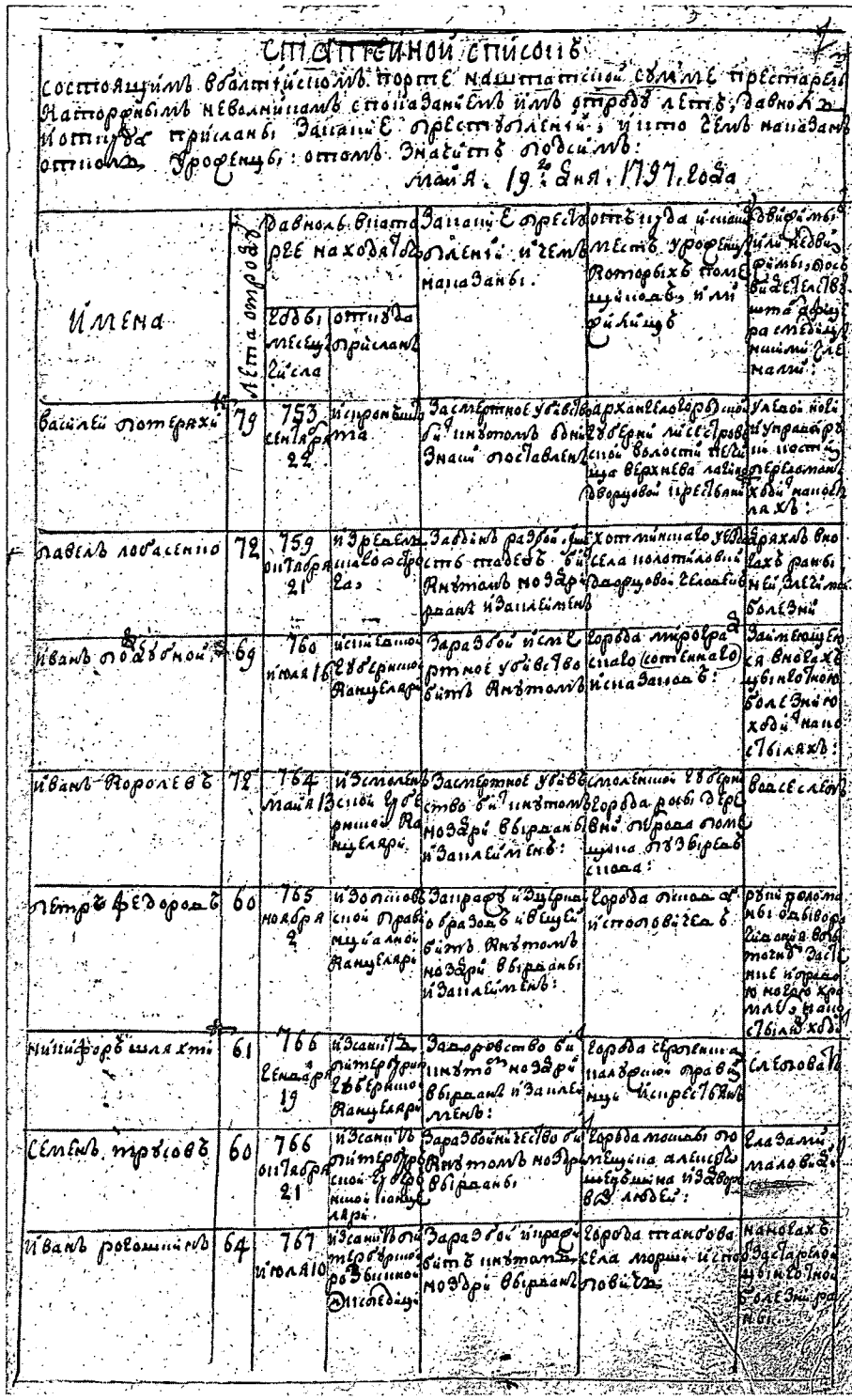
名　前	年齢	どれほど前から流刑地にいるのか		どのような犯罪を犯し，またどのような刑罰を受けたか	どこの出身か，またその領主は誰で，居住地はどこか	司令部将校立ち会いのもと医務官による〔身体が〕動くか動かないについて〔の検査〕
		〔やってきた〕年月日	どこから送られてきたか			
フォマー・ラーピン	55歳	774年12月3日		パスポートをもたずにさまざまな都市へ行き，ヴォロヂーメルで逮捕，モスクワ捜査局に送られ，鞭刑，鼻裂き，および烙印がなされた	クロンシュタットのフリゲート艦聖ミハイール号から脱走した逃亡水兵，スタリツキー郡ホルメッツ村ゼルネヴァ部落，領主イヴァン・アンドレイヴィチ・モーロフの家内奴僕	両手にはまったく指がない
エヴスチェグネイ・スィソエフ	45歳			ボールゾフ少佐殺害を企て，銃を発射して右手の2本の指を失わせたことに対し，鞭刑と鼻裂きがなされた	モジャイスク市オザロヴァ部落，領主1等少佐アレクセーイ・ボールゾフ氏の家内奴僕	中風を病んでいる
パーヴェル・ミハーイロフ	57歳	774年12月3日	ウグリチ郡官房から	ヴォロヂーメル街道で元老院参事にして帯勲者の故フセーヴォロド・アレクセーヴィチ・フセーヴォロドスキー氏に対する傷害を負わせた事件のため，鞭刑と鼻裂きがなされた	モスクワ郡皇室領イジェリスカヤ郷メリコメリナ部落の皇室領農民	左手の骨が損傷し，あまり動かせない
カンザファール・ウサーエフ	62歳	775年1月31日	元老院令により，元帥閣下でレーヴェリ総督にして各種の勲章所持者であるフォン・ゴルシュテインベク大公からの命令書を添えて	国家的犯罪者プガチョーフの事件のため，鞭刑，鼻裂き，および烙印がなされた	ノガイ道オレンブルク県ウファー郡ザヴィザヤ村の（ミシャーリ人勤務人）百人長	病気なし
オスタフェイ・ドルゴポーロフ	71歳				ルジェフ=ヴォロジメーロフ市の商人	特に枷をはめられた手足は十字に組まれている

名　前	年齢	どれほど前から流刑地にいるのか		どのような犯罪を犯し，またどのような刑罰を受けたか	どこの出身か，またその領主は誰で，居住地はどこか	司令部将校立ち会いのもと医務官による〔身体が〕動くか動かないについて〔の検査〕
		〔やってきた〕年月日	どこから送られてきたか			
イヴァン・ポチターリン	47歳				オレンブルク県ヤイーク市のカザーク	病気なし
イヴァン・スミルノイ	60歳	775年3月2日	ベリョーフスカヤ知事官房から	至高なる（女帝陛下の）命令により，彼が公安を撹乱する3通の捏造した誹謗文を書いたことに対して，鞭刑，鼻裂き，および烙印がなされた	コゼリスク市ポレノク大村の堂役者	左手と左足があまり動かない
ヤコヴ・イヴァーノフ	64歳	775年3月24日	モスクワ捜査局から	2名の逃亡兵逮捕の際，他の者とともに彼らを殺害したことに対し，鞭刑と鼻裂きがなされた	カシン市前女子修道院ズャトコフ相続領の経済農民	労働で〔働き過ぎたため〕腸を衰弱させたことから胃腸の病気を持っている
アンドレイ・クリーモフ	55歳	775年3月24日		彼と仲間たちがミハイール・クプリヤーノフ少佐，その妻アヴドチヤ・フェオクティストーヴァおよび娘の家で計画的な強盗を働き，村長であるセルゲーイ・エヴドキーモフを殺害し，そのうえ金銭を強奪したことに対し，鞭刑，鼻裂き，および烙印がなされた	スーズダリ市ドゥブロフカ大村のボリス・イヴァーノビチ・トルストフ伯の農民	壊血病と癲癇を持っている
エゴール・ヴャジーロフ	64歳	775年3月24日		モスクワで酒保商人であったとき，兵士がやって来て彼のところで4カペイカ分食事を食べた〔食べた，が	ペルチマ市ポシェホンスク郡ドルゴルーコフ公の農民	腹部がいつも硬化している

名　前	年齢	どれほど前から流刑地にいるのか		どのような犯罪を犯し，またどのような刑罰を受けたか	どこの出身か，またその領主は誰で，居住地はどこか	司令部将校立ち会いのもと医務官による〔身体が〕動くか動かないについて〔の検査〕
		〔やってきた〕年月日	どこから送られてきたか			
				2度書かれているが，一つを括弧に入れている〕。彼と喧嘩をして殺害した。そのことに対し，鞭刑，鼻裂き，および烙印がなされた		
ヤコヴ・ペトゥーホフ	65歳	775年5月2日		商人クドリャフツォフに，盗んだものであることが後で分かった偽りの住居を割り当てたことに対して，鞭刑と鼻裂きがなされた	ドゥミートリエフ郡の7等文官ジノヴィエフの家内奴僕	中風を病んでいる
エメリヤーン・チュレーネフ	65歳	775年7月2日	陸軍中将にしてカザン県知事，および帯勲者であるメシチェールスキー公の命令を添えて	秘密裁判により，処刑の代わりに罪人を〔罪人，が括弧に入れられている〕無期懲役にし，国家的悪人のプガチョーフ事件に関しては処罰なし	トボリスク県ヤルトロフスキー地区クングール大村の兵士の子	老衰していてほとんど目が見えない
ユライ・アズナリン	75歳	775年11月29日	モスクワ県官房の命令を添えて	以前にプガチョーフの悪党たちのなした犯罪行為に対し，鞭刑，鼻裂き，および烙印がなされる	オレンブルク県ウファー郡テコエヴァ村〔出身〕	老衰し，足には慢性化した壊血病による傷がある
サラヴァト・ユラーエフ	45歳					健康である
この一覧表の合計は囚人27名である						ゲルマン・エクバウム大佐〔署名〕

出典：ЭИА. Ф. 29. Оп. 1. Ед. хр. 7426. Л. 7-8 об.

図1　バルティースキー・ポルトの流刑囚に関する記録文書（1797年5月19日）の原本

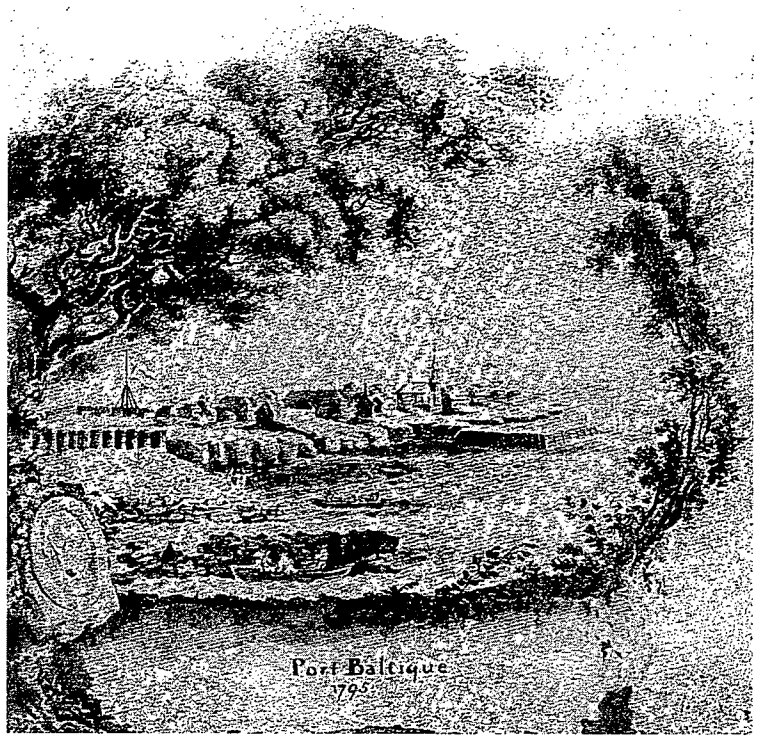


СПИСОКЪ
состоящимъ въ балтійскомъ портѣ нашатскомъ солдатѣ преступленій
Натворившимъ невольникамъ стоящимъ въ отводѣ лѣтъ, равнымъ
и потому присланы заказанѣ преступленій и что имъ наказаніе
отчинено Уфренцы: отомъ знать подписано:
Мая. 19. дня. 1797. года

Имена	Лѣта отводу	Равноль вѣдомо где находятся		Заказанѣ преступленій и чемъ наказаны.	Отъ кого и какимъ мѣстъ уфренцы которыхъ помѣщены и въ какомъ	Довѣрены или недовѣрены, достойны ли тѣ фрунтами [illegible]
		годы, мѣсяцы, числа	отчислены присланы			
Василій Потрахи	79	753 сентября 22	исправленъ	Засмертное убивство и инъ томъ воны знаю поставлен	Архангелогородской губерніи лесеровской волости Пеймуга верхнева лапинской дворцовой [illegible]	Улаго ноги и управляет и постоянно [illegible] ходи наносили ахъ:
Павелъ Лобасенко	72	759 октября 21	изъ [illegible]	Завѣнъ разбой [illegible] Янитомъ нозари и заплетенъ	Хотинскаго уѣзда села полотнянъ дворцовой [illegible]	Страхъ во нахъ ранбы и [illegible] болѣзнѣ
Иванъ Подобной	69	760 июля 16	исправленъ [illegible]	Заразбой и смертное убивство бить Янитомъ	Города Тверда [illegible]	Заимствуется в нозахъ и убивство [illegible] болѣзнѣ и ходи наносили ахъ:
Иванъ Королевъ	72	764 мая 13	изъ [illegible]	Засмертное убивство бить инъ томъ нозари вѣрганъ и заплетенъ:	Смоленской губерніи города Рославля [illegible]	Вассеслепо
Петръ Федоровъ	60	765 ноября 2	изъ [illegible]	Заграфъ и дурна образъ и вѣщи бить Янитомъ нозари вѣрганъ и заплетенъ:	Города Тула [illegible]	Рвы [illegible]
Никифоровъ шляхти	61	766 сентября 19	изъ [illegible]	Заворовство бить инъ томъ нозари вѣрганъ и заплетенъ:	Города Стрелина [illegible]	Слепова
Семенъ Трусовъ	60	766 октября 21	изъ [illegible]	Заразбойничество бить Янитомъ нозари вѣрганъ	Города Тамбовъ [illegible]	Слазами, малоумъ
Иванъ Ромашковъ	64	767 июля 10	изъ [illegible]	Заразбой и грабить инъ томъ нозари вѣрганъ	Города Тамбова села [illegible]	Нановахъ: Засторонно [illegible] болѣзнѣ

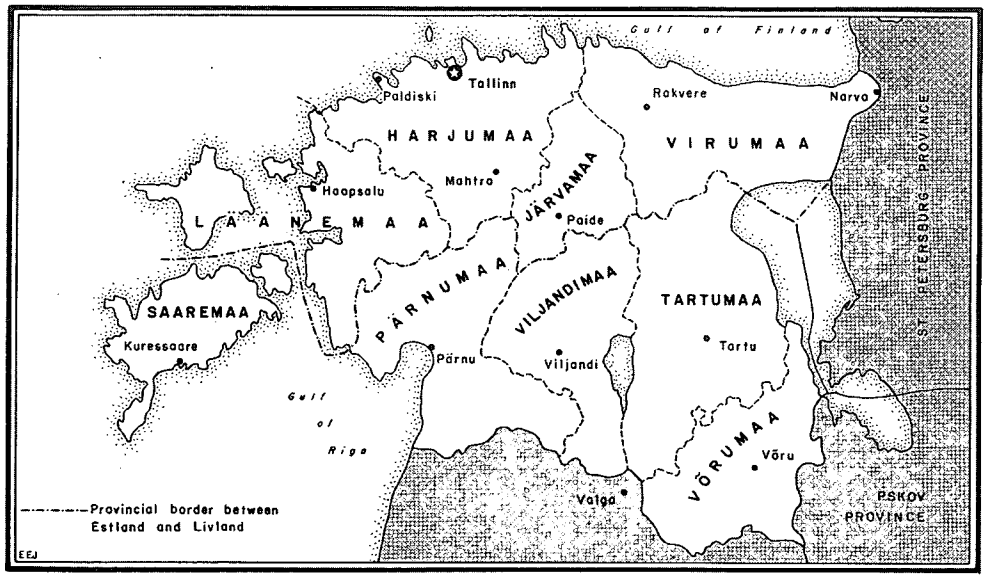
出典：ЭИА. Ф. 29. Оп. 1. Ед. хр. 7426. Л. 7.

図2　1795年のバルティースキー・ポルト（中央右手の尖塔をもつ建物がゲオルギエフスカヤ教会であろうか）



出典：Лаби (Labi B.) Пальдиски в период наместничества (XVIII в.)//Известия АН ЭССР. Т. 19. Общественные науки. 1970. №4.

図3　ロシア帝政時代のエストリャント県（1850年頃）



出典：Toivo U. Raun, *Estonia and the Estonians,* 2d ed. California, Hoover Institution Press, 1991, p. 58.

注

(1) 植民国家としてのロシアについてはさしあたり次を参照されたい。拙著『ロシア帝国民族統合史の研究 ── 植民政策とバシキール人』北海道大学出版会，2006年，拙稿「「未開」を根絶せよ！── ロシア帝国に抵抗したバシキール人群像」『欧米における移動と定住・地域的共同性の諸形態に関する研究』(平成16年度～18年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)研究成果報告書，研究代表：三宅立)，2007年3月。

(2) История Эстонской ССР/Наане Г.И. (ред) Таллин, 1958. С.178.

(3) *Лосенкова Г. В.* Документы о пребывании в Эстонии некоторых участников Крестьнской войны 1773-1775 годов в России//Советский архив. 1973. №3. С. 66-70; *Лосенкова Г. В. и Савина Е. А.* Архивные документы о смерти Салавата Юлаева//Известия АН ЭССР. Общественные науки. 1973. №4. С.407-408.

(4) *Суров В. В.* О судьбе последних пугачевцев-башкир//Вопросы истоории. 1974. №1. С. 212-214; *Галин Г. М.* Сподвижники Е. И. Пугачева в ссылке//История СССР. 1982. №1. С. 133-134.

(5) Крестьянская война 1773-1775 гг. на территории Башкирии. Сборник документов. Уфа, 1975. док. №215, 216. С. 339-341.

(6) *Сидров В. В.* Был героем Салават, Уфа, 2003. С.47-58; *Его же.* Слово о Салавате. Историко-краеведческие очерки. К 250-летию Салавата Юлаева. Уфа, 2004. С. 47-54（この文章の初出は1972年である).

(7) *Овчинников Р. В.* Следствие и суд над Е. И. Пугачевым и его сподвижниками. М., 1995. С.193-199.

(8) Эстонский исторический архив в Тарту. Ф. 29(Канцелярия наместника Ревельской губернии. 1783-1796. Канцелярия Эстляндской губернии). Оп. 1. Ед. хр. 169 (Ведомость о каторжниках, содержащихся в Балтийском Порте, в том числе Канзафаре Исаеве (Усаеве) и Салават Юлаев); Ед. хр. 242 (Дело об учреждении комисии для пересмотра уголовных дел. Списки каторжников, содержащихся в Ревельской крепости и Балтийском-Порте, в том числе сведения о соратнике Пугачева Канзафаре Усаеве); Ед. хр. 7426(Дело о ссылочных преступников. 28 апр. 1787-13 апр. 1801); Ф. 30(Ревельское наместническое правление). Оп. 2. Ед. хр. 1539 (Дело о содержании каторжников в Балтийском-Порте); Ф. 291 (Прибалтийский генерал-губернатор). Оп. 1. Ед. хр. 1313 (По указу сенатскому о содержании в Ревеле колодников, или в Балтийском Порте, 22-го мая 1784).

(9) 前掲拙稿。

(10) 前掲拙著，371-374頁。

(11) Крестьянская война 1773-1775 гг. на территории Башкирии. Уфа, 1975. док. №202. С. 322.

(12) Там же. док. №209. С. 334.

(13) Там же. С. 427.

(14) Там же. док. №210. С. 335.

(15) Там же. С. 428.

(16) Там же. С. 429.

(17) ПСЗ. Т. XX. №14392. С. 229-304.

(18) Там же. Т. XXI. №15774. С. 967.

(19) Там же. Т. XXII. №15904. С. 45.

(20) История Эстонской ССР. Таллин, 1961. Т. 1. С. 676.

(21) ПСЗ. Т. XXIV. №17584. С. 20-21.

(22) История Эстонской ССР. Т. 1. С. 659.

(23) Там же. №17634. С. 229-230.

(24) *Н. П. Ерошкин.* История государственных учреждений дореволюционной России. М., 1983. С. 133-137, 191.

(25) タリンから西へ約45kmほどにある同地はエストニア共和国北西のパクリ（ロゲ）半島に位置するバルト海の港町である（北緯59度16分，東経23度43分）（Энциклопедический словарь/Ефрон И. А. и Брокгауз Б. А.（ред.）СПб., 1890. Т. 4. С. 824; Военная энциклопедия. СПб., 1911. Т. IV. С. 376.）。現在，約4,000人が居住している。1962～94年，パルディスキ市は旧ソ連最大の施設を誇る海軍原子力潜水艦の訓練基地として基地に所属する原子炉2基をもち，約1万6,000人を雇用するいわゆる「閉鎖都市」であった。ソ連邦崩壊後の1995年9月，ロシアは原子炉施設の管理を放棄し，多くのロシア人もこの地を離れた。

(26) История Эстонской ССР. Т. 1. С. 553.

(27) Там же. С. 555, 567.

(28) Toivo U. Raun, *Estonia and the Estonians.* 2d ed. California, Hoover Institution Press, 1991. p. 39.

(29) *ibid.*, p. 52.

(30) *Лаби Б.* (*Labi B.*) Пальдиски в период наместничества (XVIII в.)// Известия АН ЭССР. Т. 19. Общественные науки. 1970. №4. (Резюме). 本文のバルティースキー・ポルトの概況は，この論文のエストニア語本文に拠らず，論文末尾に付してある長文のロシア語レジュメに基づいた。

(31) ЭИА. Ф. 29. Оп. 1. Ед. хр. 54.

(32) Там же. Ед. хр. 53.

(33) Там же. Л. 39. トマス・ブルンについては不明である。

(34) Там же. Ф. 29. Оп. 1. Ед. хр. 78. Л. 5.

(35) Там же. Л. 12.

(36) Там же. Л. 20.

(37) Там же. Л. 25; См. Там же. Ед. хр. 7421. Л. 25, 26 .

(38) Там же. Ед. хр. 78. Л. 29.

(39) Там же. Л. 33-40об.

(40) История Эстонской ССР. Т. 1. С. 680-681.

(41) ЭИА. Ф. 30. Оп. 1. Ед. хр. 1540. Л. 2.

(42) *Р. В. Овчинников.* Указ. соч.

(43) РГАДА. Ф. 248. Оп. 113. Д. 308. Л. 1-1об. (*Р. В. Овчинников.* Указ. соч. С. 193より転引用); Крестьянская война 1773-1775 гг. на территории Башкирии. С. 338-339. 表1から分かるように，1797年5月19日段階では，1775年1月31日に送られた者のうち生き残っているのは，ウサーエフ，ドルゴポーロフ，ポチターリンだけであり，他の名前はすでにない。おそらくこの間に死去したのであろう。

(44) РГАДА. Ф. 248. Оп. 113. Д. 308. Л. 1-1об. (*Р. В. Овчинников.* Указ. соч. С. 193より転引用).

(45) РГАДА. Ф. 248. Оп. 113. Д. 308. Л. 1-1об. (*Р. В. Овчинников.* Указ. соч. С. 194より転引用).

(46) РГАДА. Ф. 248. Оп. 113. Д. 308. Л. 10-10об. (*Р. В. Овчинников.* Указ. соч. С. 194より転引用).

(47) РГАДА. Ф. 248. Оп. 113. Д. 1385. Л. 3.-4 (*Р. В. Овчинников.* Указ. соч. С. 195より転引用).

(48) ЦГИАП. Ф. 19. Оп. 112. Д. 257, 333, 360 и др. (*Р. В. Овчинников.* Указ. соч. С. 195より転引用).

(49) ЦГИАП. Ф. 19. Оп. 112. Д. 257, 360, 390 (*Р. В. Овчинников.* Указ. соч. С. 195より転引用).

(50) Там же. С. 195-196.

(51) ЦГИАП. Ф. 19. Оп. 111. Д. 670-681 (*Р. В. Овчинников.* Указ. соч. С. 196より転引用).

(52) ЦГИАП. Ф. 19. Оп. 112. Д. 678 (*Р. В. Овчинников.* Указ. соч. С. 196より転引用). なお，ドルゴポーロフの名前は史料によって異なっている。

(53) ПСЗ. Т. 20. №14233. С. 9; *Р. В. Овчинников.* Указ. соч. С. 196.

(54) Там же.

(55) Там же.

(56) アレクセイ・ボリソヴィチ・クラーキンは有名なクラーキン公一族の出身で，パーヴェル一世時代に検事総長を務め，その後，アレクサンドル一世のもとでマロロシア総督，1807～1811年には内務大臣，その後，国務院メンバーにもなった。なお，アレクサンドル・ボリソヴィチはその兄で，パーヴェル一世とともに養育され，皇帝時代には2度にわたり副宰相（вице-канцлер）を務め，アレクサンドル時代にはウィーン大使，後にパリ大使を歴任している（Экциклопедический словарь/ Ефрон И. А. и Брокгауз Б.А.（ред.）СПб., 1890. Т. 17. С. 62)。

(57) ЭИА. Ф. 29. Оп. 1. Ед. хр. 7426. Л.2.

(58) Там же. Л. 4.

(59) Там же. Л. 5.

(60) Там же. Л. 6.

(61) Там же. Л. 7.

(62) 正しくはベゾヴィヤゾヴァ村と呼ばれていた（*Овчинников Р. В.* Указ. соч. С. 197)。

(63) ЭИА. Ф. 29. Оп. 1. Ед. хр. 7426. Л.8.

(64) Там же. Л. 8об.

(65) Там же. Ф. 30. Оп. 2. Ед. хр. 1539. Л. 7-9 об.

(66) Там же. Ф. 29. Оп. 1. Ед. хр.169. Л. 138об.-139об.

(67) Там же. Л.11-12.

(68) Там же. Л. 137-137об., 140-140об.

(69) Там же. Ф. 29. Оп.1. Ед. хр. 242. Л. 9-9об.

(70) Там же. Ф. 29. Оп.1. Ед. хр. 242. Л. 6об., 44.

(71) Там же. Ф. 30. Оп. 2. Ед. хр. 1539. Л. 97.

(72) たとえば，1797年5月19日付けの「記録文書」ではロバセンコの出身地がホトミンスキー郡となっているが，同年7月の文書ではホムティンスキー郡となっている。また5月19日付けのではカンザファール・ウサーエフの出身がミシャーリ人と記されているが，7月のではその記載がない，などである。

(73) これは国家に対する反逆を犯した「国家罪」を取り調べる機関として1695年に設置された「プレオブラジェンスキー官署」に起源を持つ組織である。1762年に元老院の管轄下に置かれ，元老院検事総長がそれを監督した（*Ерошкин Н. П.* Указ. соч. С. 86, 132, 133; 拙稿「近世ロシア民衆の意識 ── 18世紀の民衆は何を求めたのか ──」『明治大学人文科学研究所紀要』第58冊，2006年，296-297頁)。

(74) ЭИА. Ф. 29. Оп. 1. Ед. хр. 7426. Л. 10-10об.

(75) Там же. Л. 12-14. なお，本文で述べるように，政府は「要塞労働」について，それがタガンローク以外の要塞でも必要であると考えていたようである。

(76) Там же. Л. 15.

(77) Там же. Л. 16-16об.

(78) Там же. Л. 17.

(79) Там же. Л. 18.

(80) Там же. Л. 19-19об.

(81) Там же. Л. 20.

(82) Там же. Л. 22-22об.

(83) Там же. Л. 23-23об.

(84) Там же. Л. 43-43об.

(85) Там же. Ф. 30. Оп. 2. Ед. хр. 1539. Л.12-12об.

(86) Там же. Л. 23-23об.

(87) Там же. Л. 82-82об.

(88)　Там же. Ф. 29. Оп. 1. Ед. хр. 169. Л. 67.

(89)　Там же. Ф. 29. Оп. 1. Ед. хр. 7426. Л. 63–64.

(90)　Башкортостан. Краткая энциклопедия. Уфа, 1996. С. 501.

(91)　ЭИА. Ф. 30. Оп. 2. Ед. хр. 1539. Л. 41.

(92)　Там же. Л. 42.

(93)　Там же. Л. 44.

(94)　Там же. Л. 45.

(95)　Там же. Л. 46.

(96)　Там же. Л. 47.

(97)　Там же. Л. 48.

(98)　Там же. Л. 49.

(99)　Там же. Л. 50.

(100)　Там же. Л. 51–51об. なお，通達では囚人数を13名としており，まだ12名としているディトマールの9・10・11月報告が反映されていない。

(101)　Там же. Л. 54.

(102)　Там же. Л. 55.

(103)　Там же. Л.56.

(104)　Там же. Л. 61.

(105)　Там же. Л. 75.

(106)　Там же. Л. 97.

(107)　Там же. Л. 123.

(108)　Там же. Л. 126.

(109)　Там же. Л. 127.

(110)　Там же. Л. 136.

Salavat Yulaev and Experiences at Baltiiskii Port:
A Case Study on the Regional History in Imperial Russia

TOYOKAWA Koichi

This paper aims to examine the circumstances of the prison at Baltiiskii Port in Estland province under Russian rule for several years around 1800. To this prison at Baltiiskii Port, or to Paldisk (in the Republic of Estonia today), were sent the comrades of the Pugachev Rebellion, which took place against Russian government from 1773 to 1775. Among them were two bashkirs, Salavat Yulaev and his father Yulai Aznalin, who played a leading role in the rebellion. They were arrested in Ural in 1774, and 1775. They were sentenced to corporal punishment and imprisonment for life at Baltiiskii Port.

Baltiiskii Port was originally called Rågervik in Swedish. In 1718, it was taken by Russia in the Great Northern War. Peter the Great decided to build a navy base and a fortress at this port, and he called exiled prisoners throughout Russia, including Salavat Yulaev and Yulai Aznalin, for the construction.

On 7 November, 1775, the Russian government issued the fundamental law on "The Organization of Provincial Administration in Imperial Russia". Estland had to wait till 1783 to put this law into effect through two laws issued that year.

The Estonian Historical Archives (EHA) in Tartu in the Republic of Estonia has extensive archival materials on Baltiiskii Port and the prisoners, including Salavat Yulaev and Yulai Aznalin. Although earlier researchers shed some light on the archival documents at EHA, they haven't made clear the circumstances surrounding the prisoners at Baltiiskii Port. Not only did I read the materials there which they had cited in their articles or books, I also found the documents on this point which they hadn't noted.

There is an archival document regarding 27 prisoners, including Salavat and Yulai, at Baltiiskii Port on 16 May 1797 (EHA. F. 29, Op. 1, Ed. xr. 7426. L. 7–8 ob.). Prince A.B. Kurakin, general-procurator of the Senate in St. Petersburg, wanted A.A. Langel', the governor of Estland, to present to the Senate a list of prisoners in which were written the following: name and age, date of arrival at the prison, the organization by which he was sent, his criminal acts and punishments, his native place and social status, and the conditions of his health. Kurakin thought that the prisoners should be employed for labor at Nerchinsk, Irkutsk and other fortresses. Although at first Langel' also agreed to send the prisoners to these places, he later seems to have changed his mind. In the end no one was sent to the periphery from Baltiiskii Port.

Besides these materials on the use of prisoners, we find other documents which showed the concern of authorities about their daily life: the food which they ate, their clothes and winter hats, and so on (EHA. F. 29, Op. 2, Ed. xr. 1539, L. 12–12 ob, 23–23 ob, 82–82 ob.), though we do not have archival materials about implementation of plans of the authorities.

Salavat Yulaev died 26 September 1800 (at 48). We don't know the exact date of

Yulai Aznalin's death. It seems that he died sometime between July 1797 and to 22 May 1800.

Keywords: Baltiiskii Port, Salavat Yulaev, the Pugachev Rebellion, the Estonian Historical Archives